

三品長三郎編輯

近世五戰記

全



A604

近世五戦記叙

昇平の久しは慣て治乱興亡の本と想はざるは諺に咽喉過て熱さと忘るの  
 謂あり。往古より武將交りて政權を握りて世と鎮め国と治めむとされども常は  
 擾騷絶る時ありし。徳川氏より禍乱と平定て二百余年の静謐となりし。祖先  
 家康が数度の戦功は因るが中にも三方原・姉川・長篠・小牧・山崎・関ヶ原・大坂陣と  
 以て公が六大戦と称せし。是則ち四海泰平を謠ふの基あり。今や王政復  
 古の聖代に至りし。慶應以来の戦場は於て官軍の功労大方あり  
 ざりし。彼想はむんば有るるを柳條亭主人爰に見たりて近世五戦記  
 を編輯し。以て余は校閲を乞ふ。此書りてより大人君子の纂者有る供  
 毛なきものありざれども治世の乱を忘るるは假名歴史をば見輩  
 必も緒て一其其猛く勇しんと愛も乱世の惨状を察し。今日昇平の善  
 政に會ふ天恩の厚きを感佩せしむ。

于時明治十六年四月上浣

柳亭種彦記



近世五戦記

48-3496



榎本釜次郎

松平容保君



徳川慶喜公

上野  
輪王寺宮

西郷隆盛

近世五戰記

在坂 柳亭種彦校閱  
東京 柳條亭華彦編

緒言

源頼朝一旦覇府と鎌倉を用いた天下の政權を掌握せしむる世の武將相繼いで興り一治一亂を交する一木遂に徳川氏四海を戡定一昇平遂に二百余年士民躬やく遊惰は治れ家も亦權を握るに及ぶ機運は際會せ淵源を尋ねる小頃の嘉永六年水立月のことありたり西墨利加の軍艦万里の風濤を凌いで相妙の浦に浦梨の港に未だ一國書と掲げて通商貿易を請求するに頻りあり幕府再三附絶されども怒りおどしおどし止せしむる朝令と待せしむるに答はあらず天子の志士幕吏の出接を怒り慷慨悲憤攘夷の論勃発して一方は終紀一物中く櫻田の變あり開老升伊掃初彦と上巳の香と教一坂下の突撃あり安房對馬と奥中の處とみさんと條の如く礼をばせぬありより幕府内憂外患を固く四方彌縫繼つて朝廷の召し不慮に屢々上洛して公武合符の策精ひいせんとするの際長防心付の役ありおのり平定せしむる小治

達徳川十四代の將軍家から文政の陣營を立して盡せしむる附に朝廷徳川刑部卿を在りしと宗家と嗣ぎをび將軍の職を襲ひしむるは國權を奪はれも容れざるに遂に心決大將軍に二任權大納言を在りし任ぜらるる之則ち元治元年十月又日あり爾來鞠躬邸家の乃よ力を尽さるるに惟も大慶の將は顛覆せんとする一本の根く支ふ可きやうを付し先帝崩御の不幸あり又外人を庫園港の如く迫る國家は多事あり此時より山内宗室君を將軍軍より大政返還の故を脱くを容れざるに遂に改政を依りて維新の年三月十二日あり蓋し此間細大の事情備記をきと頗る多しと惟も後書小略らざるに以て其要領を摘み伏見戦國の元因と兎童小觀易くしりんとするに己らみ教の緒を陳ぬ

伏見の役

兵の凶器あり然れども礼を定め果ては法をいしよ依らんば根を抑く治礼貞之の係る如く

人為と雖も亦天歩の然らむるありんや曩も王家綱を解き改権武門は墜しより朝廷の  
 名あつて実ある奕世覇府の拮据と受し由り此より機至つて徳川氏の末流別ち受意二年正月將軍  
 の稱後と徳一及み大改復吉改権令を朝廷に改まり此より朝廷諸藩と系於より一及み會儀を  
 紀徳川内府に此時二系城小在しと改令一と奏問と遂げ四親裁と仰いで以て大改復還の實と  
 明くみと徳て朝廷も諸藩の名屋ある者と系於より一是より先出候も處せし一七郷方の  
 不備と備ひ且外国は接するの策と問せ給ふ諸士各々書と上りて意見と述べ其有大同小異姑  
 く徳川内府に依拠し一重た諸藩との系も末々  
 考ると後つて事と決まるとあり同年十二月  
 八月小沛所より於て再び會儀と開く相會する  
 公卿諸候より徳大寺中納言岩倉右近衛督  
 徳川義徳松平定房徳川義久  
 山内容堂の諸候及び諸藩



士より尾張の成瀬隼人の肥  
 田如雲越前の中根雪江沼丹  
 某藩物の西の若く助久保  
 一藏若下某土物の後友象次  
 郎福岡後治等あり此より諸藩  
 後久君登後して曰く改権已  
 り朝廷に復ると由り尺寸の  
 土地をたれば費用の由り  
 如何にせん宜しく徳川氏の  
 封土を削り以て朝廷に収む  
 べしと之と賛成する者多  
 し唯り山内容堂右近衛督



山内容堂右近衛督

して不可とみ一曰く幕府國の責任は堪えど、（一） 皇朝の終らむ所よしと諸藩と  
 皇も亦徳ちあらむと然るを徳川氏のみ限り封土を削らんこと公明の正措ありはし須  
 らく列藩とも國の大小は従つて公平に分課し以て朝廷の費用はあべきありと辨むこと  
 一曰く一場の後論とありて遂に夜を徹して諸公漸く退る徳川内府は此日の會儀は其  
 らんぞ多かりて意甚だ樂まざる思ひはるるに度く後を採り多く輿論を容れて時事を決  
 まると云ふに能く諸藩士皆が晴の初希と獲んで朝令を仰り事と増換せんと條るる  
 らんと遂に會津衆名譽普代の諸侯と二條の城は集り相若し後と奏書と朝廷に奉り九月の  
 會儀は其らより一故と如し且舊の如く政權を執らん事と諸公是を抑く伏見の役は起因  
 ありて是より朝廷内府と拒ひ内府も亦自ら安んぜざれば徳川旗下の諸士皆長藩の系は入  
 ると彼後ととぞ痛く内府を呪るるに諸藩士の心中皆憂りごとく然るを居るる渠  
 の御中は隔らんと最甚し如き迷ふ大坂へなり彼堅城は廻り四方の要害を固めて括らく京  
 都の挙動を窺ひ時隙を先んずと發せんとと百方之を脱く内府遂に容きて同十二日の夜

會津衆名譽の諸侯と先驅とる一曰く大坂は下る其名とある如く下下の粗暴を制する由を以て書  
 朝廷に送きさう時よ京都の守護隊將領地を治山回帝之也等之を固て大は患ひ相若し後  
 方板志東敵と此地より引退て勝を奏せし者殆ど稀あり今東軍遠く浪蕪へ下る宣めて測る  
 如あはし一備ふは渠若大坂城を根柢とし軍艦を併ねて各岸を扼し且我が援軍及び糧の  
 と塞ぎ而して徐に關東の云を徵し四方より攻撃し来らば我が孫吳の器ありとも只之を米ぬて  
 向又の首を隙むと待のみあらん豈危ふらうとや今條は之を防ぐの謀略を巡らそよ早く但  
 馬丹波丹波へ兵を遣ひ順送と脱つて諸侯と奏る如きと後より一決しう次で同十四日  
 後宣系兵の方、朝廷の経費を徴するよりあり然諸藩は負保せんと決し尾張大納言城お宰  
 相と大坂を下し内府と後宣獄より列ね而して其封土を貢があらんと論を尾抄の成濃軍人心中不  
 二麻呂徳津毅堂毛受洪相若し束の速く入朝あらん事と勅め且又會津衆名譽の入京を止め只  
 後宣と供して判らるべし第一害心を懐くの危ある所は尾越兩藩の云を以て必き後宣を止められ  
 御り念とまる勿きと具さふ朝省を宣べて統論然るあり内府心強り小之とあむおおも陽を備し

入朝と初使に小森次郎一若つて伏見にありし時、幕府新撰國の長邊者勇士方威之守後地より  
 て兵數千と屯集し不附の要は倭兵田中徳澤亦之とて其穩らありざるを慮ひ主將永井尚志  
 又而會して曰く内府已に朝命を奉り入朝と約せ然るも其意とて能らざるを弄するに和つと  
 主將は傷付るをらん邪宜しく速くよと云と撤べりと主將之を信されども遂に仍りて明  
 主將明治元年正月於日尾浪大納言被希宰相内府の及命とて京於より入り入朝の多と奏上  
 せ然るも内府の速夜會津衆を兩藩主及び徳下の諸將等と大坂城に集り入朝の事と依するよ  
 及んで諸將士皆憤懣帝と打て之と信りて日尾形被希兩藩と由も固より人心の及慮り  
 されば容易に依れむべきありと況んや會津衆名の入京と禁むるを由使よろうと後日會津  
 くの只一死以て君に復し堅たを彼う脱と探り君側の匪徒と掃つて一挙天下の大勢と定ん  
 と更に同者も勤められ内府も遂に之と決し會津の事と先強と多し東方の事と決て大坂と  
 散せんと用意已に整理ひるに早くも京於より安んじ人心の固く庶民の東西より南  
 よ曰く免然島の沸がめく是は於て朝廷薩長を藩令ト云と由とて伏見會津の要路を塞

ぎ専ら東軍と名を濫して京於入りざりしむ隊の作地知し治山田布之丞亦會津一軍と  
 物より先達て朝廷小藩の如あり東軍必大と云と奉てあるべし然る時、幕府を以て急なる  
 固より時、隙と機と慮むるの策なる可らむ且云い拙速と尚むと云く今彼処は在て款と  
 彈丸と交するに際し、兵も必の糧なく枝葉上とせしめて指揮と為るがごとく一連の事と  
 何らばあらくい大事と深らんと述ぶ朝廷此奏と然りと一令して徳川を急大と帥めて入朝  
 するを條々會津衆名の如く固く京に入りて禁むるを命と用ひされば便宜事と計れと云  
 治會津一軍地と率つて京府伏見の支隊より固く之とせざるを誓ひて六千五百人  
 り去る程に東軍の總勢と方有餘と唱へ會津衆名兩藩と先鋒と一引續いて依る進め久  
 保田備前亦亦會津衆と引連は前後より松原河本の諸將を以て一巻薩長の云と破  
 らんと猛威と觀して進發し已に會津の圍に迫接し相捕先づ使者を遣ひて朝命を周り圍と  
 するも亦官軍固く距んで肯て使者悽然とて京入り内府命と奉り入朝せんと云  
 然るも是亦會津衆の事と以て敢て距む欲出能く距まは清ふと云と昨我に我が脱と云と

園と珠 瀧とと 人のみ と大云 して去 る續い て東軍 喧嘩先 と争ふ て園よ 通る官 軍之と



是に後て於て... 園と珠... 瀧とと... 人のみ... と大云... して去... る續い... て東軍... 喧嘩先... と争ふ... て園よ... 通る官... 軍之と... 是に後て於て... 園と珠... 瀧とと... 人のみ... と大云... して去... る續い... て東軍... 喧嘩先... と争ふ... て園よ... 通る官... 軍之と... 是に後て於て... 園と珠... 瀧とと... 人のみ... と大云... して去... る續い... て東軍... 喧嘩先... と争ふ... て園よ... 通る官... 軍之と...



又よ及び一官軍の存儀慌忙と云り報言松城軍今日の戦ひは痛く撃れて大ひに疲勞  
 一兵今午名無に控て松城を喫一彼も礼をせよといふより官軍旁にも頑や軍の務る  
 ぞ此圖を外さ疾疾付し一人も潰さず付とれといふの語市本大山後夜あんとの人々先  
 小宗出に本よ記して城の前後と團と集るといふも烈しく付立れば皆あたるが勞れ果る  
 儀云木何ういひて城のさ一抗抵もせよ因章の右儀左儀は礼もも程と控てあし離れ我先  
 あと逃るるを何方までも遁とて猶よ志する官軍は彈丸兩注のふと溜り溜りくと打揮電  
 光石火と夜て早れり着るく城の死骸の辺傍に積むを丘とて血の流して河とてあま已官軍  
 充分の捷とぬ一松城の存軍此殺絶とせと毎く斬を以て進來り銃口折へて夷然一散與  
 き叫んで標をれば皆ひひ勵まされしは收まされしは城も義と知り恥と思入葉の流る解血  
 よ咽喉と潤し引返して撃入りく交と先途と戦へば傾は極た官軍も不意の援けと殺戮の  
 若戦よそ身全後あられが勞れしよは傷を負ふ者もあく十餘が一隊よあるまよ由と  
 心をくうの焦燥とも刃柄は彈丸を迷憾あつても後陣の方へ動と一月は潰れくれはる

市本大山後夜木の人々の目と睡ら一雷撃する一汚辱き味方の拳動る綿纏し松城逆儀業  
 撃へ何万ありとて大の初はるるあるよりな返とて大喝一夫指揮を傳へて危を勵し自ら  
 志はよ躍り出でて誘敵しく城軍の真中突へ近入と響のこくお花來る彈丸と物ともせを撃  
 一城の左翼と突窮せざる勢ひは倅易し稍後危きれども多勢を斬り一歩も退を隊將目を  
 ぬ敷と丸と槍もぞ撃りる礼丸のふよ槍むべ一市本素氏ハ狗板ドツと打撲れ血爛り立てる  
 よりあるを初とるより大山後夜の支那ハ椰子奮迅の情りとなりを考教と吹外一殺務とも  
 なく付とて味方と勵し勇と奮ひ城と四方へ退敵らせは軍遂に敵一とて殺しよ殺せせ  
 り此戦ひは官軍の方も死傷をも多りする中よ市本大山後夜の二羽も遂に付死るせし  
 を永退ひを有と云と團の支那へ引揚る此所多勢よ於てハ朝廷作地知氏の條畧を用ひ西國  
 ち中細々と大羽と一と精を三百と換け損る丹後木の備置一巻り一藤トら後日の計を為さ  
 む身後明は六月の曉天城軍昨日の失敗を懣りけ日は是れよ支圖を破ると云と云と分ちて  
 隊似とい一能旗天を槍ひ被る地よ富き山岳もえがなりはあるをうり勇丸凍結としてあ來

なる所は伏見の多野山田孫一帝伊集院全常帝木の入るてより士卒を替へ固より寡を以  
 て多に敵を討つるも必死の覚悟を以て只息の音の何んか一守りもせしむる所は  
 子孫をせしむる所は必死の覚悟を以て只息の音の何んか一守りもせしむる所は  
 ありしが官軍の時分を機りてと一夫隊山田の指揮より身を替へ替へて  
 下と撥潜り陰刀の先を拵へて一夫隊と跳り込めあるに任せぬる所は  
 月時より飲まされし一夫隊は必死の覚悟を以て只息の音の何んか一守りもせしむる所は  
 立ち息も喘ぎ替りる弾丸交はるる所は必死の覚悟を以て只息の音の何んか一守りもせしむる所は  
 月時の方へを以て一夫隊は必死の覚悟を以て只息の音の何んか一守りもせしむる所は  
 一も突然流矢の如く一夫隊の中より官軍の伏見救起り立ち先連ねて身を替へ替へて  
 も仇いなく敵の本營へ侵入せしむる所は必死の覚悟を以て只息の音の何んか一守りもせしむる所は  
 是れ此れは我々の所は必死の覚悟を以て只息の音の何んか一守りもせしむる所は  
 ども更なる所は必死の覚悟を以て只息の音の何んか一守りもせしむる所は

宮純仁公  
 朝命と奉  
 ぶと徳格  
 あり金  
 甲馬よ  
 騎せ給  
 ひ来りよ  
 以身を固り  
 赤泥後垣替  
 く者くと旭  
 日よ輝やた  
 進み来れは



近世五十年記

乙

官軍之と見て忽ち百倍の勇氣を倍一奮闘激戦力を以て戦ひる程に敵軍遂に抗抵る  
 正能は甚大に礼を請ふ所の屍骸を悉く生を争ひ殺さるお柵を將の敵軍も已に破れ別  
 さん如く大起りて檣棚天と焦一燒燬地は悉く燼すまんどもふむるも何うされば敵軍遂  
 よゆるべきを先一是れ北を逃へて澄城は分る此所紀藩の人殺す有餘大坂夫も中よ  
 此集せし密に使者を以て内報の表と官軍は清入隊は此地に交れ未と進と受て強なる  
 中紀藩先末敵と戦戦さう今僅く必運と辨して来り隊ると由も中未は後一殺一殺小  
 彼の云と本面入返りの將ら申の宣まるを後一むらよわざと軍後頼し決して使者は徳  
 と令ト速よ天皇との云と速くめいとど世の人と称して仔細知木の志深深慮と感ト合  
 ぬ徳と多相伏え表乃の官軍の勢ひよ亦ト何日の早曉よをむて澄城と及む敵軍澄城臨  
 て官軍と川を中うて砲撃殺別官軍殺をまきせし敵軍餘は勇一者殺百人と擢  
 んで川下は後る甚蘆葦の中よ伏せ重なる更に精多とめて戦ひと挑む官軍早くを伏せある  
 と初く速巡濤濤をむ考る一然る小隊將石川素氏たひよ怒つて自ら陣陣は躍りぬを先と

激すてあふ安まや虎窟よ入るされば虎の胆を以て老まきと見て様様なきは何もの附り  
 敵と戦さん且人の嘲笑と如何せん朝令と重んト命と塵埃の煙なき比一表勇ふまきむ  
 峯に我は續けと云捨て早先延んで敵の表向へ付て驚きは有極よ先年敵一激まされ  
 隊は已に初のど一我倫争う命と惜まん續けくと先を争ひ忽ち敵の先陣と若もあく右  
 へ付殺す時一も後て階居一敵の伏せ一皆よ起り前後より討包んで勢ひ烈く搦立たれハ  
 官軍の先を石川任右中將の法多勢のたよ先田も進よ果敢あり付き多怒とるより  
 後陣よ折一任集院柳田村と浦さんとの諸隊は火ひは傍り死と被殺して居隙もあく將を  
 るは皆ひは敵がかく乳胆と浮置立てて見えざるあを官軍は力と究り叫き喚びをむ程  
 よ敵のいやく防ぎ難ね久保田依るも官軍の中み死と暴一遂に惣場大崩とありて搦  
 本まを退きは如く陣とを搦へる付に平牌あり官軍は程をんで澄城と為一將く  
 人馬の息と休りぬるは友者の云に敵軍のこもふ山傍の崗ともつて赤き砲の交へされど頑  
 と云の將出さん形況して隊隊と奮入ける一官軍より物使と下され然るは逆の理

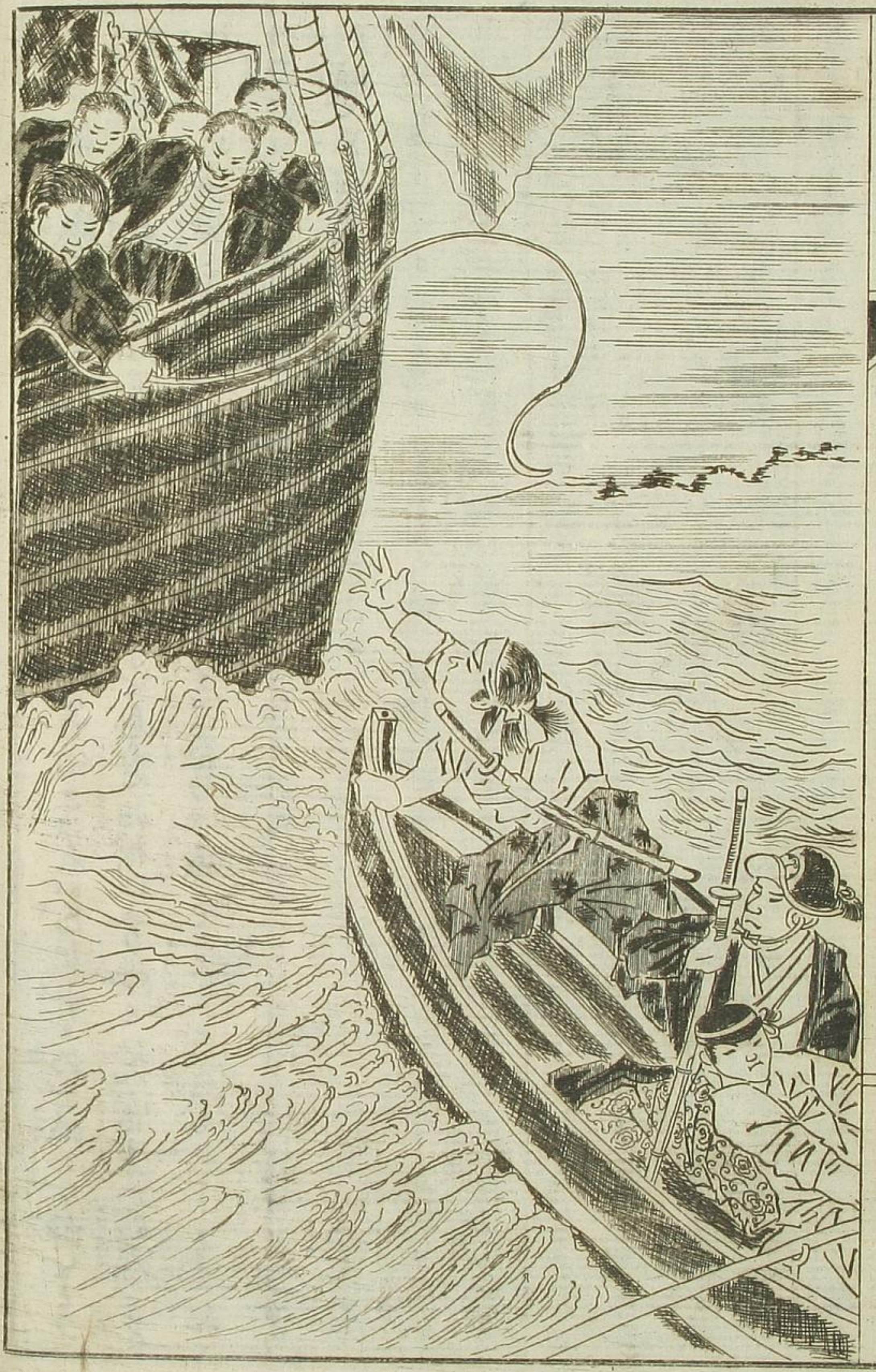
と疎べぬの  
 義と徐一れ  
 乃ち朝命を  
 奉じて官軍を  
 従へり然れど  
 由賊軍いし事  
 と未だ及みぬ  
 初らざりしとぞ  
 同六月官軍は  
 とをめて招き  
 の儀と攻んと  
 まるはあり城



をて後治城は知らんとされども治藩固く拒むを納まざれば己むるを治藩御陣と  
 致し致し致し一撃お取還さむと奉とあるは掛けり治藩の如く官軍は治藩と先  
 陣と一追撃を急ぎ迫り巨砲と打ち小銃と連發し呐喊して責をせし城も終つて必死  
 の激戦双方の遺砲は山岳と激動させざるは天地も驚かすやとあむるは小銃煙室を掩ふ  
 程暗く只恐も分るぬ京況あれど互ひよ少くも怯まざるを皆時がる挑み合ふは及  
 重の一隊は豫て官軍を約せしとく忽ち旗を反翻し不意に起つて山傍より横に榴弾を擲  
 の牙骨同ぐりて治藩をけ息をも物ぞ攻こればいひもあらずぬ味方の兵多し賊軍も  
 立ち退く大敵をよもう伏屍地は満ちる雲を打ち先を争ふて逃ぐ官軍傍つよきて恰も  
 利刀の竹と裂くがごとく何れもたもと追撃を急ぐるや賊軍の如く途と失ひ死傷  
 とのいど知らざりし早く大坂城へ空へく内府及び各藩衆の名を治藩を板倉伊賀守小笠原  
 幸俊もあはひに惜み救済を求め治藩は救済の心を以て只君側の者を掃えとの精神あり  
 も事遂は為し及みぬと敬と待つべきあるも下先東より地目の動靜を伺えんと探る

近世五戦記

十



物も救ぞ汗るは靴と過て海岸より直ち小田湯艦よりこき候と解て東よる是は於て城  
 軍の逃まて大坂より一者も大坂に在らざれば再挙と謀らん極もなほくみくみ乃と求め東  
 の方へ逃まらるる程は官軍の勢功と奏上り伏見の取らぬ全くと平定せり内九日徳格仁和寺  
 焼き凱歌と唱へ則ち諸軍の勲功と奏上り伏見の取らぬ全くと平定せり内九日徳格仁和寺  
 宮をむて大坂より御機を飛と進儀諸藩の方向と問ふ附より列藩會衆命令は從がの來る  
 同土日朝廷治と奉る幕下の官位を統奪し大ひは東征の作と記さんと有栖川宮と以て征東總  
 督と名し海陸軍の初め諸藩命令と曰く去年徳川幕府の御托し大坂小田くや尾城あまを  
 きて幕府と論と系する一節も命するところんとを然るよ奉る幕府大軍を率力畏し入京候  
 棟下る會衆あまを先鋒と名し入船と名せんと以て朝廷と要せんと候は官軍と名を  
 郊外より防ぐるると奉る幕府と抗するに救日邊より支る然るに一般の命り東よるを飛割せ  
 ざるべしと備藩努力と志し幕府と軍下より上せよと有り月晦日 重上候し東征の幕務  
 と觀んと大坂より幸む此所よりあり備藩の官軍水陸乃と分つて因東へを發る幕府の幕務

丁丑二戌巳

十一

長祿紀抄後後方城より作上京龜山水に大村小海陸よりと薩長の別軍因抄土抄大垣本  
山乃よりをり而して錦旗の向ふは龍うさるいあり遂は皇威赫奕易世不易の禮奉と東京  
みとて宜めらるる

### ○上野の役

明治元年九月日東征の官軍薩長大垣本の徳元治等の徳後と威後一をむを板橋はとも  
徳督官城仁柱生も亦海路より後河内へ為し徳ひぬ然るも是より最徳川登喜のふく先相と梅  
ひ恭順の突と表して上野宮中中御子の隆人にて徳と徳との板をさし梅と宮ふりてとせと  
愼まされ執事見院本と俱小後府城へ移むるは徳督を偶と視て衣類せらるる相と和定  
比天降院の方よりも女使とさして同日トく登喜の恩免と願ひしは此時海乃よりをみ一官軍の先  
陣一晚は品川海へ登りて是より控て幕府安房ちりい後て後海より官軍の来謀ある西  
隆盛と西倉して登喜恭順の首と具と陳べ且に城に付と押せらるるを徳ふ房抄素と西  
比氏とお徹る者さして登喜と登りて事情と疎射一は愛お懐ひるもど西比氏稍後して之

と徳督官より何んかと先附飛の突情と徹さすもと倫を房抄乃ち命と交けて去る徳を西  
比氏より徳督を具状せし官を昔は後と遂に諸軍へ命を傳へらるる板橋の比  
証付の夜と止め備々の官軍と後地よ並に各々を指に成らむとあり是より一月に日よ至  
り物使に在城へ河内あり所は徳川の家庭未路と清め板と及びて途へ入り回安中納公僅んで  
朝を水つるを物官の徳に城及び軍艦軍を致らる献納のまくと且登喜の送と補助  
せし者の死一者と宥せしは因り飛祭と奏せし又登喜の死を宥し水戸へ戻居せしむと  
あり回安中納公則ち命とを登喜と因て徳川登喜は一日と終りて並に水戸へ返りぬ然る  
は徳川氏の家庭もてと激の業は大ひふ不平と憤れ各々登喜と推して東山の方へ脱走者  
者をも多く或は山に隠れしは戦場と閑さし此月関東監察使之條に大に安房公より  
物とをよとに戸より徳川氏附飛の突功と著しと以て回安龜之助と宗家徳川氏の家督  
とありむむも能く物難為幼少も登喜と松平確堂は命とを諸事と務めりむとあり然れど  
も不事未だ何程物よとありこの定まらる幕府官性く危く親ふ者抄るるを徳と城

由るよき  
 武勇さ  
 く没収せ  
 まれば激  
 流等も  
 憤怒り同  
 多人殺害  
 結ひ  
 と茶人と  
 る者多  
 中おも  
 隊と唱へ



惣寛永ちと根柢と一痛まの官と狭きで窺く小私憤と雲さんと企つるに激の流あり  
 然る小渠木の挙動と執尚竟五院恃よ勢成して恩を知り後世の者とも一却つて高樹の  
 政令と批致一筆一宮へ悠徳て渠等と庇護る一遙く小倉津赤内諸藩と約一車と茶人と後  
 りられバを坊ひ此流も感ん小報き云々と行へ仕士と募るよ後方諸方の脱云故を  
 身と揚よ受るた者成ひ一時粉は迫り一之類の子弟未陸陸入隊日盟せし固これ鳥  
 合の流素るま軍一一定の紀律あり自己が時威権と毒一櫻りよ虚構と示し傲慢むも  
 毛べ一た中おも市中巡邏と称へ腰刀の長き刀と佩び足も下流と後きよは鉄骨の  
 と指しつゝ慢然市街と徘徊一官多よ邂逅ふ毎よ必も罵り辱しむ為時官軍へは符  
 肩は縫付けて以て標章となせし一彰後隊の法おも之と有ると符を拒む者忽ち  
 刃殺をみど愛く暴威とを衣ひたる程は官軍深く憤怒りて遂に渠等の担器と奏しこれ  
 殊戮せんと諸藩考よ法ふて止まざるは於て後督及び監察使之條より徳川氏命令よ  
 申示氏集せる衆と解散さしめんとされども渠等更し後を念く暴行よ募るのみなれば

督の宮よ  
 へ安の  
 ぬあとも  
 思一  
 主次之位  
 とるて  
 傍らまけ  
 るゆう束  
 着は氏集  
 せる幕  
 等あつく粗  
 暴の拳初



彼乃とすいあは金と論五寺の宮の意中よりあつるあともいれさるるが一平竟不れ  
 激法が大臣を分を辨せぬ松懐は因りて初朝憲を蔑視するとは元より今お括て  
 三平早と東家山と卦き宮内乃とせ宮内乃と仰せふは公命を深て地は東家  
 ら是が此時既と激法は馬つを固く決一最と地を掃下り然ればは公命の案内を以  
 て論まふ宮内乃と對面してをた名総督の命は依りは之位推集せりと傳達し  
 るる時よ山内あは是を院水宿ろふお舎と議一なる指宮は級は對面ありて  
 うむぬを以不例と作り速くふい級一やまべと急派一決せしはは之位は餘と入  
 来ると総督の命は因り論まふ宮内乃の宮内今は月乃とせ受あるべと坊官を以て述  
 せしるるはよまは急接の坊官懐んで言へるや宮内は暴政より以不例して今  
 らせらる依て法對顔の程も何あるべきや候一宮内は強たは地は中よとて引違さ  
 が暫時あつて出来り宮内具さふやと一知南村身柄扱めて衰弱一寸安由自  
 るの病状由多不冷は面後もお成りて候ては宮内は後いひも因りて右左と  
 総督の



宮へ以て敵を成下さざりしとの返命を述べたに後ありは激流木が中なるまじつて事を練  
くんと思ひま今い途方多く及ぶよとてい及むれぬ然もは形況を激しめて近衛の布氏  
今も事の起らんと流氷を踏むのあひをみ一人心頗る拘くう去る程は深し居り  
其の後総督之入具よ及むれりや馬令の御軍糧の痛まぢの事を要して天威を懼  
め事を起さんと流氷の飛空は打撃をくべきありと速く一挙して御軍を滅せしとの故  
よ因りて素係大村等と相會して軍隊の上命を伝付の事と決し諸藩の官軍を合して向ふ如  
と初署一二月十日拂曉を以て御軍攻營と定めらる別ち東登へを登る諸藩あり薩摩肥  
後同抄の二藩ハ湯島より長州肥前肥後大村佐伯東あはれよりをを代備前後豊後阿蘇尾抄  
肥前豊前筑前筑後の官軍も亦一々向ふ如と定めらるるを速くと御軍は此より十日の夜  
の内よ上野へ大方便え一々今と虚威を示せし族心中大ひは恐怖して悉く小籠を去る  
者數百人よ及びる然も中より我を唱へ死を定せし者も亦數ありて御軍は此より  
の用意を付儀る人よハ湯井雅樂板倉伴等も小笠原を後知行中丹後与池田大福も久世隆

後者柳永隆等密受其他も加藤中條も水井も水正も及治も之等去日まはる大久保と亦あつたあり  
又諸藩の程も六柳永隆等情の長松平云々大捕の家士もて各隊を分ち彰義隊別隊控  
隊諸藩風隊費隊並官隊水隊旭隊神木隊明石隊滋賀隊赤松隊杯を始めとて  
撥去隊の諸隊と合せ官軍未だ一敵とて日頃の弊慣を晴さんと兇賊も毎に其謀の策動と  
知らや知らばや者を用意よ及びる諸藩如く静寛院文長及び天璋院殿の使者後於素  
氏及び田安家の使者一色素氏二藩相益んで汗る小籠高て東登へ池本り馬も亦て馬宗放  
し声高らるる君命を傳へるは乃ち面談を中に入られ激流木獲て此をたまへお進し御軍にて  
隊長のあまある時よ並士云々とていひるやう君命隊の長も亦らむ今者も山山よ立登り  
官軍と雲端を聞くとするの機已は且夕は迫り事一旦起るとして先君朝命を奉り恭順  
謹慎と表さるの實を破り遂は朝敵の汚名を来し加之於下敷万の生具を塗炭に瀕らむるが  
どたは實は居る者の為まきあはれむ然も各々其の固執の最急の勇のそ集めて  
官軍は抗抵せんと密に準備せらるるに恰も先君の肌膚へ刀仗をあるがごとく死しその不忠

此より先ん我々の主君を討つる事を要するに官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を  
我々を以て使者とす。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を  
辨り煙拳を結んで早く悔悟せらるべし。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を  
一必死者の多しを恩命を計りんとす。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を  
第一格を著へるべし。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を  
何格降伏せしめんとす。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を  
ふせんと思ひも固くむ。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を  
を御りありとも一死以て報ひする赤心の介他するべし。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を  
使も今いかなく蕭然と一と立ちたり。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を  
空撥曇り愁雲慘澹。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を  
とある西よ見よ。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を  
程は官軍へ降伏せしめんとす。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を

彼りの力をつけ元分脱れを我々に欲するものとす。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を  
歩隊二百余人とす。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を  
惜まぬ射死見息とす。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を  
一が死と究めたる山の最も脱れれば。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を  
谷中天地はひも氏集せ。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を  
竹中七郎の軍中宗全とす。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を  
搦て汚蔑さう。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を  
氏分家の人数八百餘人とす。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を  
一さるるあるも。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を  
戦と勝ひ甚だ。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を  
云も仲所或ひ。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を  
佳大噪ども。我々を降伏せしめんとす。官軍へ降伏せしめんとす。此際緒々大義を



近世五雜記

七



近世五雜記

七

とも頗る困窮を究り上意を以て風を烈しくあり然るもさぶらむと向くべき極なきふあまの澤  
 九面ふもすて一層烈しく飛来し俄に遠く防ぎ難く山内へこそ退たり時よ俄に別よ山王  
 山は彼へと役け奉りしと散ちて頗る官軍と相撃し薩州及び自余の藩兵の  
 根は攀ち夏冬の落し極り作の是と意を盡す然るに俄に山内へは奮つておぼさんと散  
 脱せし由余澤の中りと残る者を救済人ごとと余も官軍より遠巡をせしむる者と諸藩  
 て諸藩敵しくをこころに給ふ山王攀より向ふと振つて攻詰る勢ひを以て別よ山王  
 俄に遠く山内へは退りしと散ちて頗る官軍と相撃し薩州及び自余の藩兵の  
 て火及よみさむと此亦彼を極大と致つて迫る程おまう山内より燃より又中堂より火起りて  
 最悪な下れた形状あり之より最悪な火を院へ山内へ入ると安より遠くを限りあへ極  
 官を以て来りし世間をありし脱をせしが後よ奥山へ入ると去る程山内の俄に火の  
 と奮つて防げども己は官軍闖入し法より火とすか烟りの中より大軍を以て来れば今  
 一防に押し寄せた皆散りて落んとするは付己は官軍中堂より山内の俄に火の

一が黒門被さるうとの注を以て固より是とありとひくよ道を極めて為らぬ然れども根  
 津圍子坂と名ありと坂本の新門に他名あり官軍ありて是と要撃ありしと遠く彼  
 両より付獲らるる余の幸をりしとを以て此及びより上世に侍ありしと火は罹り  
 焼けるるるゆゑとありしと知りしと殊に松樹の火は控へて宛然と費ねられた中  
 堂山門総てを極大ありしとありしと及びては極く燄へ天と極くとも同と致すも  
 むりありしが他十村の注よ及んで火も終り此一奉金く平定よ及びり

○會津の役

伏見の役東軍利と失ひしより徳川股肱の諸藩は各々願ふより諸藩の戦術の准儀大方あり  
 ざる中ふも會津惟へ近藩の諸藩と計り申と奉るの形況は顯然され朝廷乃ち征討の  
 後よ決し加勢尾州薩州長州越前松本木下官軍とて戦後により進撃せしめ薩長の別軍  
 及び大垣兵の二白川にありを散ちて付し徳川の脱士及び仙臺棚倉等の徳兵白川城は極り堅  
 固に拒戦し初め官軍將とてをらせ城を破り後よ千六百余人且つ会津の主將

山を越え付たぬ柳の川の要路をや奥羽の咽喉より入りて治まらば八方に通ずる所を  
 攻むとも小便利の地をば官軍大いに力をそと務むと幸ひて遂に一度官軍に陥され城  
 等皆潰れ堪へず再々多くの兵を催し一挙に白川城を還さんと不意に犯つて城下へ攻  
 めせ勇を奮つて攻まられ官軍頗る防備の懈とすまると重く地の利を別する渠等が死傷  
 の勢ひは敵に及ばずて遂に敗れ退くとぬらうと賊の急ち城へ入り寄り至り白川城へ  
 控て大に小威嚇と示しし備又城後には長岡小千谷の両軍軍勢多し集り要路を塞  
 ぎて捕籠りし小川は水元の表裏と喚ぶ市川朝比奈宗将同志の衆は百余人を引率し賊軍  
 より加らりしく小川を急ぐ城へも官軍小千谷の城を撃つて是を破り勝り宗  
 将と云と要路の所を分ち信濃川と隔て陣を張り又別軍に搜崩妙をいひて小川に陣  
 の地とよめ賊は四方へ退散し遂に長岡と取圍て屢々互ひに勝負あり然るも十日を経て  
 賊軍討滅を計り突如許多の兵を出ておのの官軍を圍むる敷重別は一軍を千曲川の西  
 岸より倭へ官軍の援路を絶切り殺し攻撃を及びしるおのの官軍は首尾を連絡するを治

ぞ孤立して殆ど釜中の魚に異あしざる形状あるをみるより河東より倭へ官軍の之を傍  
 観するおのの兵と軍勢と激してまづ城の腹背を籠り味方の連絡を断さんと隊長は好軍  
 おのの將長柄及び言田等の精兵二百餘人を率ひ於勢強く互ひに咫尺を分ち取らば宗  
 一千曲川の激流を溯つて敵の陣營を襲えんと欲し中流に潜出せしおのの兵は森を穿つて  
 小川に疾く水漲り船路を断れり遂に船を壊れんとするを宗一は彼方より岸より一躍よ  
 と敵に突くと聲を出して之を二に一分して驚れし敵は不意の奇兵を愕然河水の激流と聲  
 て隊伍を紛亂の形柄を驚かす陣中を散駈し恰も鼎の沸がごとく右に逃れ左に逃れしを  
 と棄て逃るるを官軍に追継り大小砲を多捕りし逃る賊徒の後より踏るもあく獲るをま  
 愈々獲りて途を失ふおのの兵は先づ軍に教札をまねりてありは薩州主他の官軍も遠く那方の  
 恐涛を御て打渡り横合より追撃せし此形況よかと治て要路を断りし孤島の官軍もて小  
 蘇生あるおのの兵は一日は十倍と群る敵の中央へ喚叫んで討ておのの賊徒皆後背を  
 敵に引受けを逃しは完りと遂に総攻軍及びしるおのの官軍もあく憤激し死を敵軍と

領を急ぎ退迫るむも烈したるを  
 將小織軍奈何とも詮方なき長  
 岡の城とさへ保ち難くあひん  
 城中火と放ち糊りし物まで  
 間乃より屠りて討城す牧野氏  
 とも偽ひ打尾と云へる雨よ退  
 ぞたされば官軍ハ一挙と長  
 岡城と拔りたる夜よまら白川  
 城の形況ハ織軍城と復せしよ  
 り搦ひ頗る猖獗すて壕と深く  
 一柵と搦へ充分防備の仕へを  
 み一屢々官軍と怪せしるべ



官軍通水橋へり孫は勢きとに  
 大表へ泊るふ及びりる後小朝  
 延乃ち同物佐祐大村亦を他の  
 云と後軍ととをさへされう徳  
 官軍の將校ハ奥妙にみか舎  
 一月軍後と凝し上運回ハ  
 後軍拳つて白川の城も迫らん  
 と諸軍命令とに方より攻撃させ  
 死とありて善く防ぎ此れを一時  
 軍が登夜帳の散砲と弾と情ま  
 官軍再び白河城と有り是より  
 年六月中旬のありたりする程



柵を破るに奮闘激戦數日維持し  
 名も負ふ雲霧の正官  
 邊に城と築て逃をりし  
 一柵を破るに奮闘激戦數日維持し  
 名も負ふ雲霧の正官  
 邊に城と築て逃をりし

香りと准儀充分お整へて敵を來れと傳ふりう附し官軍の云と二々を分ち一方の細狀より一方のたよりを以て月廿四日の曉日と炎々と柳倉城より迫り砲聲雲附りて難あり此城とも陥落しう、及み於て賊軍の悉皆く岩城平の城より鎗り連發の遺恨と此処まで回復るさんと元一被死と誓ひ勇威を以て賊人なれば官軍も殺てをまを拵ら隙を伺ひ居しが憚て在るべきのらねば月七日午よ及び糸條河田素佐久る柔宮の西と諸藩の砲聲とお儀り遂よを將の策と宜し同所柳川佐兵衛前河湯中によりまゝ柳川の別軍及び薩長大村本の云い小谷溪によりを將一二月十日の官軍より平城より迫らんとする城と併り儀汽木城外の險より擧り而して砲聲を築て砲聲と一多勢を以て集と敵とるをより文の致し小將中も官軍更ふ事とせま踏込とくお儀りおのの砲聲とお儀り城下るをく攻められ儀ふも充分依ありて関門を堅くしり彈丸とお儀り少くもる際へ寄付むけ附柳川の生洋奮戦と遂は二の本戸を破るは薩長續いて外廓まで疼痛く押寄せ熱燗を城へを付くを儀軍程も寄付と檣と隔て散砲し互ひ怯まを戦ひくは須臾

勝負も付さうりり柳川の運るは此形況は懐慮とを者檣檣と攀ち檣と傳り檣の檣をるがごとく吶喊と一度お打渡り敵の石羽を以てそれ儀軍大ひ不危めたまお自余の官軍これおるを逐し檣と打渡り只此一舉お微塵も有ると面も縮むを鏡ひかる刻したるの奮戦儀軍運も維持し颯と激中へ引了ると逃し一せと跡退能り疾くと及され儀軍も亦必死を絶しあを先途と誓合するお軍の砲声は山並を穿てて凄まじくんと云ふむりもあく何附采べきとをえさうしうに己お其目も奪るお及んで官軍雲附息と鳴んと云と要地より僅る猶再舉と併り居るおを夜三更とさるは城中儀軍お火起り檣檣お夜風よ冬槍地と懐かた焦しをく一面烈火とありて黒烟四方お漲るおを官軍を以て怪と云とをめて城お迫まると出合儀儀の一人もあらねば源く不審と懐たまがら先陣を打消して瓶く城と炎を以て憚て作儀の云とお敵の動靜を擧るお儀軍後地の險阻を輕く死力と極めて防戦せしうと僅るお日も支へざして切而を破るは要地を奪らるは既にお迫られてい最早防がん御計をたてて官軍の攻撃を待んより城を燒き去るを纏めて下先運雨と為る

よねごと儲を初らぬせしとど是時よりありて仁和寺の宮あり會津佐保智とて西園寺  
 壬生の友家と流ぐ諸軍と率力て越後におませしは是より先此隊の官軍は既小長岡の城と  
 抜きおく不龍登と築たをせし武備最重ふ成と示せば諸軍も亦一級の小小控拵せし諸軍と  
 集り僅器と及び會津米沢安岡及び小池川院をのぞき堅く守りて要路と塞だす夜路あり砲撃を  
 せとあり雄雄と決まるるあり荏苒小漏るるあり官軍遂に後と決し大挙して城の巢窟と打  
 破り若松城へ迫ると計畧と宣り諸軍の死配りを假まらざる官軍の別隊大體小糸込と水原  
 と新發田の領内を為せしとる漁をありしは諸軍の勇氣十倍一羽二目は必き一擧に元城と斃  
 さんと腕と格で片喰と看んでを夜に各々眠りおるが為し市中の人民も竊り小絨へ内をな  
 し徳と妻と告し官軍大いおち候ひ精兵數多擧げしと夜半の頃より糧多し静肅に  
 て繰出しか款の要地よ及びける壘へ去ると押あるや吾大小砲と連發せしが初るべしとい毫  
 知らず官軍は皆枕小枕をたて着と繕へるわらわら笑はれは是と上れと己み款の御中へ陥るる  
 りるれば陣のべき擧勢も多傷と被り難多あり右様左様小段をまるとはつらりと諸軍源





するもく退降し傍より宗と長岡の城をく攻めしう此州城中の官軍は砲声遠くは  
 き備り我々賊軍を攻撃せんと是をうり此一挙小は賊軍を殲さんと安らうんと名々雷と  
 とふるもく砲声遠くは傍より宗と長岡の城をく攻めしう此州城中の官軍は砲声遠くは  
 賊軍に迫りぬ用をせしむるもゆるせざ山岳一帯は崩れをりしと揚する  
 難波走つりて打出せ賊の陣丸より怒り飛来るも宗外の者を官軍に懐きし由あり  
 懐きし由あり味方を励まし進で暫しが程の防ぎしが惣勢を寡めたの事にも今初陣  
 陣と向る答なきは敵の来ることいふべからずと油断せしむるも宗外の者を官軍に懐きし由あり  
 維持ちる血路を閉りて敵をなまを懐きし程逃さざと徳兵衛は追迫り嘆き叫んで聲をれ官  
 軍交小途と失ふは遂に河の中へ退はし命と殖者者あらずと徳兵衛は懐きし程逃さざと徳兵衛は追迫り嘆き叫んで聲をれ官  
 曉は長岡の砲と後せりむも這回初く速く不務利と評し一は小宗も公へるごとく此地の市  
 民皆小宗の順とせしむるも官軍の勅諭と抑りて一は徳兵衛へ内をせしむるも宗外の者を官軍に懐きし由あり  
 の意表小宗を初歩功と奏せしむるも備又官軍の復を収めて二は小宗も公へるごとく此地の市

氏一は信濃川の西南より岸小流の砲を第に再び長岡城となくんとふるもく此  
 大小砲と聲をれは賊軍も宗を不堅と及び稍もまれの勢ひ小宗下川と論て迫らんとする  
 形況あるも官軍屢々戦ひ懼し人衆と云へるは徳兵衛長岡を後せしむるも官軍の勅諭と抑りて一は徳兵衛へ内をせしむるも宗外の者を官軍に懐きし由あり  
 い味方頗る若しめり今宗は急し務めと変せんと思標あり死傷多くしと傍とも却つ  
 て云威と換せぬぬ頃史此地と退を後風と推して宗と討つべし必完全勝ありと伴後  
 區にある坊うう系深山形来し宗とをめて首とす押り今や一退とも味方全軍の  
 一退一歩とをめは徳威と振き一歩と後らば徳威と信さん語る危急の秋不あり故もく云  
 と退をけ軍機と去るもやいれん思つ宗不依まは白川口の我軍の戦ふ毎に不務利と評し  
 小宗地方と畧す一日は奥羽へを移すまう一留小宗徳兵衛宗ありとも必む皆後小宗ありと願  
 意するの心ありと久し此地は難く難く諸君勉めを懐きし由あり徳兵衛宗ありとも必む皆後小宗ありと願  
 一云小宗率とも小宗まされ更し攻降の策と変し廿九日の曉宗不宗と妙えはより穴大をして  
 潜り小宗陣と窺へば徳兵衛宗ありとも必む皆後小宗ありと願

津禱り一休ある由官軍はうと枝刀にて會釈のみさぞ瀧入り交々不敷十人を次作  
 一續いて小洗と乳敷せしう麻身おの儀云々續く大方あるま一枕抵もせぬ殺教者お  
 一も豫て謀合せ四方の官軍一哄子起り潮水の湧み吳あらぬむ由列りた勢ひのて  
 長岡(及)菟り城下の市御ふ大と致ち烟りの下より砲聲せしう兵軍をく狩易一又のわ  
 長岡城と保ちりまは香海よあつて殺れる一何とともなくあはれ官軍後び城とつらつて  
 先子織院(内)をせし市兵未と捕(軍)門小集着る一已ふ後地を定めしう及び降成度とも  
 あた戦争ひも慶々云々と被り一由長岡城と格めとて市中大方焼亡一荒世未済一と  
 り一とぞ及ふ又九条河原の二郷より會津付格將として湯士敷十人とは之を更相法備ふ  
 りて順逆と論し格揮するほど痛く何れも命と奪せざるは唯一秋田津生約未の藩の  
 と領は官軍お帰領せり及よ於て初めより會藩と志しと格せ申と奉んと圖りるを内藩  
 士等痛く不使よふより慶々境を侵せしう秋田生約の方未敷及ふ及ふのまゝとて他川  
 を他の統未未内務お加りて既小秋田の城下を攻寄せされ秋田生約の方未他は後らる

船方なをれは藩城路んと旦夕は迫りき危きと果卵のど一敷ふ九条家急と許官と領  
 りあり財は九条家砲の支御(仙)居みせしう是より先小仙居及び米沢の支藩とも一度同郷  
 の指揮と申しと會津の士境へおせし小會藩と格つて信ふ知あり支藩乃ち之を奪れと  
 解つて南船丹羽(春)十層と白岩よ志し種々評故と尋ししは若藩も支藩のめを如と  
 及ありと稱し渠と救えんと同盟一更に連署と以て支藩の飛と着させんと九条家不情ふ  
 九条家依て救せられぬふ未済世良兼管謀めてのふ格會藩支小附飛の言あふ城と出で云  
 及と毒をて怪んで朝命を候べきふ未済の氣をも更ふく却つて盛ん小防諒の策と為しあつ  
 ら湯よとて却て飛と附き恭順の言何にふりある目つ仙居以下の法藩士等密に小織院  
 護する者多しと聞く然るは若藩連署と書と若よ献するを仙居を候し因に採用し難  
 一と別ち支藩と美度され其意と保ちて去津とけつべきまを命令せしは法藩士未大  
 つ不激一未済世良氏と要殺しを飛状と唱へて若藩と格動るまお其羽の法藩はあふ知記と  
 若よ去津と候らんと若もを保るよふれば九条家砲の支御も已よ命令の仍りまざるを知つて





此の者最多数に兵隊新方より指揮をとり、要所を占め、教らせ、俄に亦長進せざるを  
 纏めて城に入るこゝに教する官軍稍集まれ、賊を再び城を出せしめ、然るのこゝに襲ふと一月の  
 中屢々まれに官軍を以て防衛する者、連夜眠りおぼく、と然る路を固却せしむる、賊は此の官  
 軍長岡城を抜くより進むを察せしむる、別軍大船を打ち立て、山海を航し、水原新沼の橋を  
 破り、上流にて若松の官軍を連絡せしむる、是が為め、賊勢稍挫けしむる、未だ藩の官軍は内なる  
 一續いて、法々の官軍も進み、若松の城に合し、勢ひ益々、急よ及び一隊の及軍、天守寺山  
 とを占めりて、暇なく、下を敵城を奪取り、小怪は、毎日、此戦砲を放ちたり、然れども、賊は  
 更にも、世を能く防衛す、傷むと、及び、急よ、賊は、隙を心懸てありて、防ぎ、く、官軍は、砲を  
 と、城の東南、小築、た、未、ま、ま、と、砲、撃、ま、れ、と、城、を、高、の、怖、る、と、あ、く、倭、城、を、突、出、し、て、及、軍  
 の、當、面、を、襲、ひ、出、没、自、在、に、働、か、ら、る、ゆ、ゑ、急、を、の、死、傷、多、く、な、り、と、甚、だ、に、憤、懣、し、て、又、の、也、其、の  
 砲、を、より、石、榴、弾、を、連、發、し、た、れ、ば、櫓、及、び、丸、中、り、此、彈、丸、甲、方、を、破、裂、し、て、城、中、を、亂、れ、し、  
 死、傷、者、最、多、し、と、重、い、犠、牲、を、納、め、て、後、せ、し、ま、り、或、い、は、紙、を、空、中、に、飛、ば、し、て、賊、を、杯、する

体よあまの将率懐激しき迫りて只一巻を攻めんと押あさる此所は城を以て法まりて  
 在りたるが時分を據り城門を左右に開いて突出し敵砲の網の下のりは物を据つて攻むる必死  
 と宛めし織の怨氣は官軍を打ちまじり死傷者者多かりき遂に後をさうりたる徳とる  
 より城を以て長をさまきと引揚げ望く城門を因次さう然れば東條陣地初山程の法君も後  
 まるは城要害堅固あるは織死懐の勢ひまじり容易くは落しと由も徳在再目と彌ら  
 新方よ不意の變ありんも初とせは上は兵法勢無くは方より城を迫りて一時は務役を決  
 するの外あはらざるぞと軍議一定及び九月十六日子の刻より総軍城を圍むと救意日  
 疾るはあつた將よあまを城を願る勇あれども官軍は防禦の術計をたきと圍着し通るの  
 隙に一巻を以て汝備區をさうり未遂は潜伏と決し九月十九日はあり後士を代本程を秋  
 月傍二帯と使者として米沢藩より仍り一巻の由と官軍も出せり此時雲津の長高素等も別  
 に一書を出して主君の飛を代らんと信する切あり仍て東條の南よりは去汝の後潜伏と許容し  
 此上の藩主父子ともあ来る廿二日未の刻軍門より出て汝の城及び雲津の類は悉皆没収する

命令せられぬ徳と約定の日よまじり隊系の急接として別ち官軍より中村山形のあま若松  
 城門を執るよ及んで後主父子の礼後と表し刀を脱しを株伏せ是より官軍は城中の益意  
 と収り後主及び家族を城下の妙玉寺に屏居させし後主は翌日よ及んで官軍護送し株屋  
 代まで送りし後主は是より初の日よまじり仙臺南村を内を隊の備度もお次で汝り及び  
 益意と官軍も献せ是よりあつて奥羽の擾乱殆んど平らげり時は朝廷始して東山征討の  
 備軍と慰勞し各々毛布一枚を賜へ徳と十月七日よあり奥羽二十余藩主の罪を以て書ふ  
 あり 聖朝寛仁と意は各藩主の死一等と赦しを封土三分の一と割り月姓と七家名と誓  
 しめ給ひし實は賤世の恩沢よしと是より 辭報と他は潤ひは民奉つて仁徳よ後より

○函館の役

古の人回札極つと治とあり治極つと札とあると我邦戊辰以降の發札もろは長夜の一夏よ  
 て這も亦今日の不運よあまの機関ありて西國を際て地固る敷ありん乎向しを戊辰最後の  
 戦争に別ち函館の戦争よとを看し是は寛文四年の秋八月廿日の曉は徳川幕府の海峯木蘭陽

回天艦能神速千代田形長崎長縣大に風風ホ九艘の艦ヲ乗込ニ石川灣と出帆一少向ひ  
 仍程上総洋まで暴風ホ含ひ快船艦を被ト捕と失ひ獲て香風以港み碇泊一開陽と格り結  
 被被せ一艦不と繕ひ居りしは脱走の陸多大多並々官軍の仙臺陸軍邊へ標し一よりを逃  
 己は究まり被けと海をよこし再挙の策と誓せんとしよ大智並々方藏之古を他を事  
 本多華七帯人見傷を帯ホと始め隊二千五百余人と結船ふち条一舟を風浪と出帆 十月十  
 二日南於仙臺古港より新氷と後入廿日の新南船決地のうち艦の本と唱る場所より  
 然るに脱走のけりあり波来せ一報名と函彼知所清水岩竹地一海一尚朝廷一歎歎せんが  
 見揚希希本多華七帯と一歎歎と齎一云隊二十人と獲湯と一風波と後たて上陸一休下  
 一向ひの翌日金軍上陸して函彼小向ひをもちる函彼の知所の脱走の軍艦能の未へ波来  
 せ一と望み函彼法の云隊を陣と大井村一揮一人見本多の旅彼と襲撃を是に控人本  
 命と本解するに候あり己は防戦を程し脱走の函彼小向ひをもちりけり来りて人見等  
 助け終り脱走と逃げしは艦の本と一は報知を以て軍の艦へけりしと知り逃し後隊と

標出らる徳兵一人見等ハ亡る歎と遂て大井村の陣と奪ひ又又月村とある七重村一  
 脱兵己は殺せんとせ一折一由隊長大岡甲次帯士官後防於徳を帯本多は被んて奮激一力と  
 閃りて歎中不突入を所と好条等も脱と被て刀を揮つてをもちれば歎遂に脱走を脱走未程も  
 少と退て大よをもち首と斬るに十余級味方の死傷も被りありてと好い遂に付死一  
 剣と薙りぬ然れども程坊より各隊をんて徳因に後部より迫る是より先み後部より一  
 の利ありと慕一清水岩竹地に脱走と徳と函彼より普魯士の兵船にて津野一遁逃一  
 たりこれバ脱走ハ及し血塗らむとて後部と被り所より廿六日ありま艦の本より松平  
 希被本多希希帯兵軍の勝利と望み回天艦能の二隻と函彼一四せ一清水岩竹地逃の波  
 あり又抗するものあり徳と此雨の外主人の居留地あり慢りよ散砲をもちり一  
 官軍の脱走あり一と望み地より上陸一後海を以て成らむ姑く一と後部より陸軍来  
 是より徳て廿八日秋田の軍艦を雄号脱走の函彼をもちりしと知れしと入港せ一  
 隻俄に脱走伐て之を奪ひ船田徳を獲と捨て去る後良便と為り送り用湯艦一捕の結

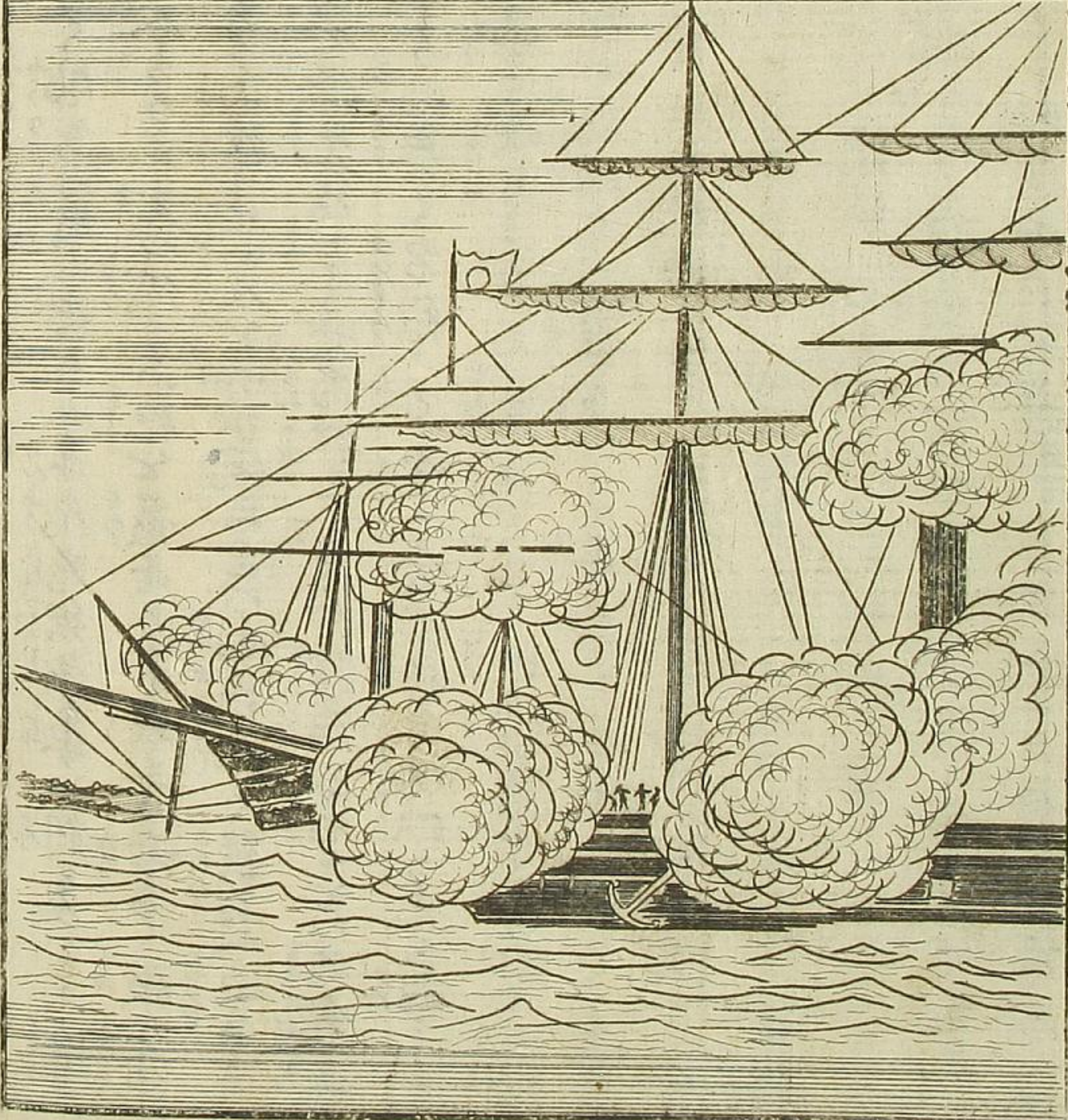


勝ひて得て瓶く城に入りたる此所一夜の云い山を遠りて城の後より墻を論て攻入るは城  
云い前後は款を引きて交り打させらるる事と遂に支出るに能はざれば開如く付死す一城  
い城を投出て脱れ去りしも勢なりとむすの何者か大を放ちしや城下部分のこい焼失さ  
是より松前へ城の所有とあり小多是より先松前志摩守の先年の是より六里西にお  
あり飯村と云い地は新城と築き居城と在りしは福山にて死に脱れし一云い城  
此新城は逃来り城の極威の獄人あると告げると告るも是より安田拙造ある者勢ひ  
防ぎ難きを察し領し小藩主と勧めて他邦へ遷らしめんとせし是月藩の鈴木田原  
い安田の周備あるを怒り通りて渠を殺せし一藩よりは撥擧せり余程小脱去るは脱  
し福山を察しありしは此勢ひを抜きしは飯村のありしを攻むと海陸の云い謀計  
と合せ則ち土方宗三といふを率わて本居より飯村に向ひ松岡常次郎といふ二股口の  
乃よりをむ此時投本谷常兵衛といふ用湯船より宗三と十一月十二日の黎明に飯の沖より  
て天の明るを待たせ岸上にて二ヶ所より篝火の見えるのと相見し七夜明し小舟は海山より

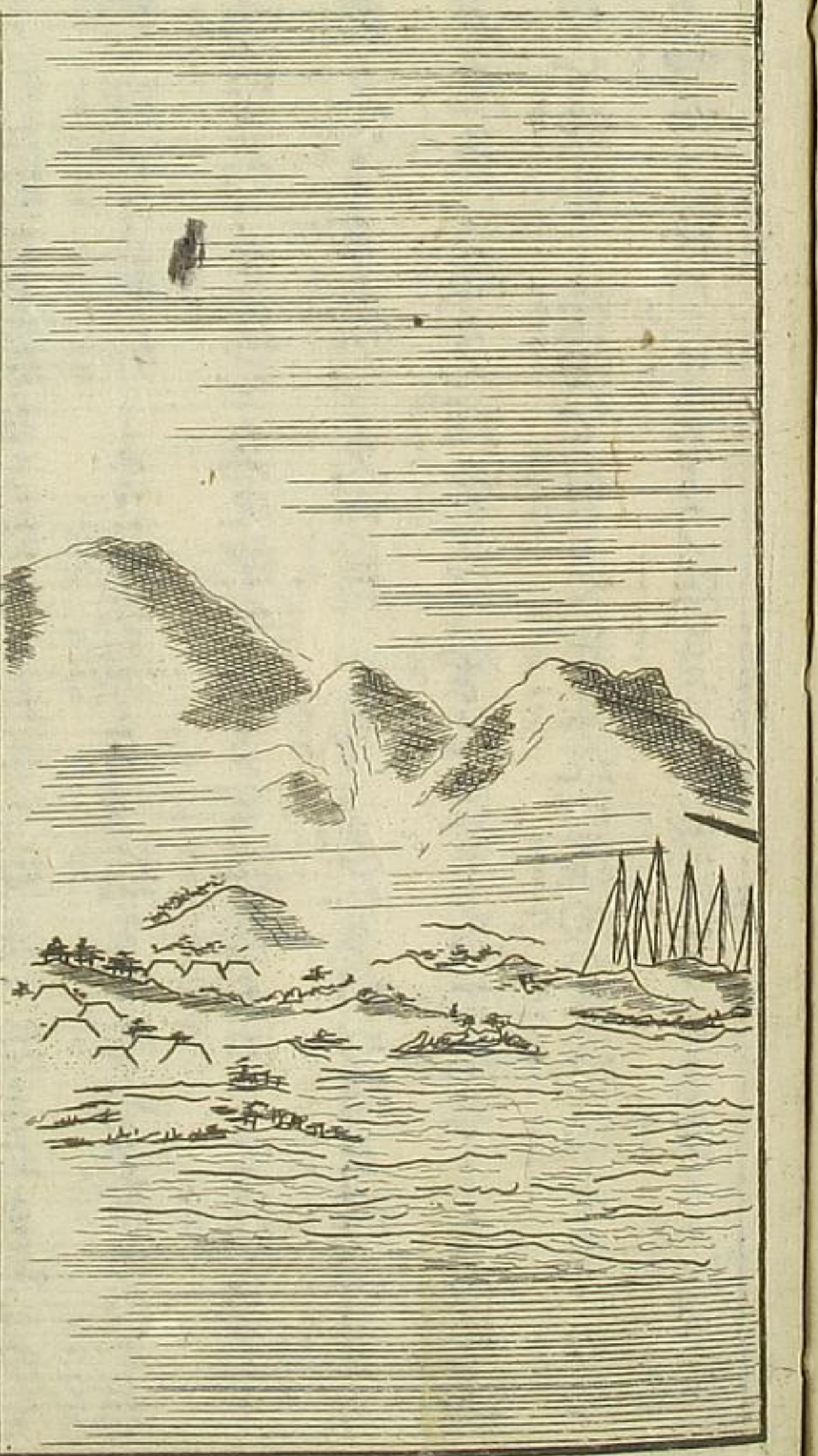
積りて舟波恰も浪と交りるがごとく風浪同地と云い一を風浪宛然舟身と刺るがごとく一遠  
陸地の方と云い寂寥と云い一人をみる一志づ誠と云い不袍と云い意を考む後一人の  
云い率ごもるを依りて鴉傳と云い上陸して土人と呼ばれぬは希夜悉く船を返す一  
中多にたれば投本といふを分ちて陣を設けしは船を返す一陸軍の来るといふ合せ居  
たりしは此日も己は尋常の頃より風暴く雪烈しく夜に入りて霧を風波もあつて烈しく  
用湯船の確保つと能く岸を攻めしは小皆力と云い一沖へおさんとをれと云い  
るに遂に涉洲ふ系より系來るの海底あり晴礁多くと再々系を去るに能く是の上  
連日暴風止まらば上陸もあらざ死に候ひるより一漸く霧之日小舟より風少しく結  
まりしは此日僅に云い系と推して上陸せし後十日を待て風波のありしは全船悉く破壊  
せしと云い抑此間用湯船に在る壬戌の歳投本といふ命より和宗院より日玉「ドル」ト  
ト「云い地は投本を築造せしは百馬力二十六挺備へる軍艦もて六年の星君と傳へる成  
戊辰の正月澄伏は事件の起りし時投本は投本を築造の軍艦もて九年の星君と傳へる成



をよ由佐浦より焼みさしめ  
 春日丸の弾丸を救ふ所より  
 僅くも返るといふせしめし堅  
 艦中てを渡りし海防艦の海  
 艦も威力を逞しうせし本邦  
 艦二の戦艦ありし此不幸不  
 罹りし六枚砲未だ暗夜に燃  
 火と見ひさるの地せりとを  
 是より先松希と發せし鐵雲  
 十二日小沙子女流のち雲と戦  
 ひ勝りて吹吹木の材よ  
 助うに島の報と改まき也ぢふ



江利へ標込る此時函彼もて  
 開陽艦の危難を安き島列回  
 天神速の三艦をさし一校をん  
 としこれども風波烈しとを付  
 とつを是より依りて田天丸の將  
 士と沖より一が神速丸の機  
 関と換て更し動も暴風の  
 乃よ海岸に押揚らる船体斜より何れともなる潮を  
 さうしが救日の後船底破きて再び用と假さるといふ  
 の一欠に十二日猶倉石の関を破り鶴村軍と破村へを  
 雷を雷とて妙城は遠れし為るは後属の牧軍は山井の  
 と壁く強一塚のる不決砲と配り頻りし礼登よ及ぶみぞ  
 雲を雲の後に山井と論て押寄せ

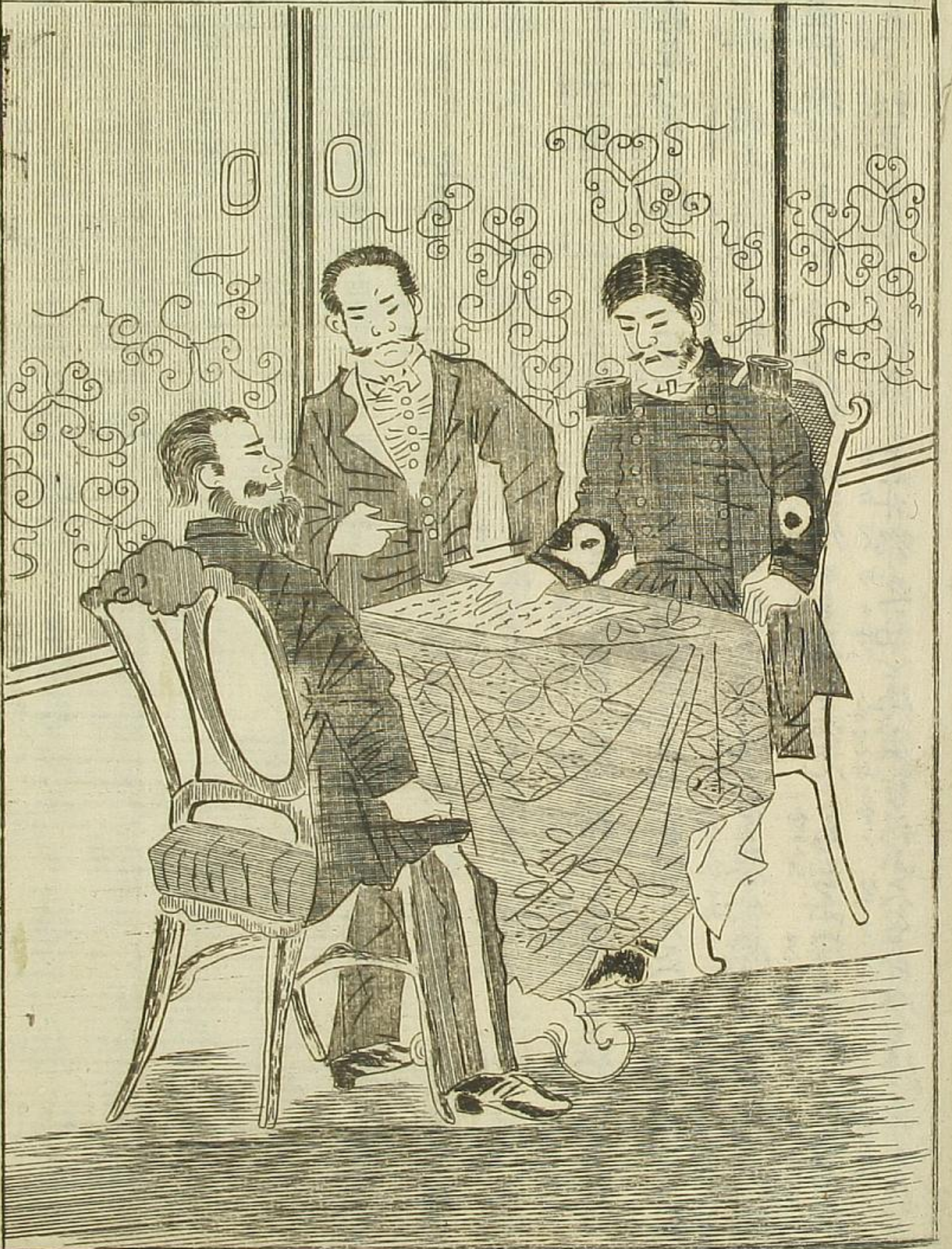


するもこれ大砲を牽くと然る唯小銃と連發と向するのこゝれは城門を破るに  
 然るに此内脱走のち不越智一郡と喚ぶ者砲烟は終に城際迄くをきあり門扉の隙より  
 擧り入り門費をとり外へ射方と招いて戦ふもあまは是より便うとほく一度は嘯と相入り  
 たり然れど舊其の救急の故軍と憤激をせよあめく決死の勢ひをき一皆防戦ありし  
 が款は要知と察せらるるに遂に款をきとほを皆殺しに付みされるるを中みし上報  
 順と名乗る一個の防主飛來る凡と物若葉を左に廻板と持ちて弾丸を防ぎおふ一刀と  
 振り閃々と逃り出で群る款と殺しに難外へ一勢ひ頗る極烈を向ふもあまたは  
 へ城軍の中より伊奈源一帯と喚りつゝ血塗をりて傷をかけるを報順を刀まで捨あが  
 始りく挑と戦ひしが伊奈の殺すおふを傷と受け脱し危く之をこれに城を横田豊と  
 希に脱走と持ち此より伊奈が危急と援え頼定めて撃んとせよ小宗何なりとん後撤  
 發せよ程懐るも報順は城一帯と殺しに横田と目をそらし飛來れば横田は鉄砲を打ち刀の  
 柄をとりひて援えんとするも報順は城一帯と退きしに後継りする者も一より作

向きより作ると報順はうと案より只一討し切付る此内城の軍監塔を物と形  
 状と見るよりも飛がやくみ死付て報順と切絶せざるの報順急雨の涼疾は降りぬ  
 遂に命を預せし城も防ぎも柵を破へて適者なりぬ此は城は遂に陥るを  
 是と賊の長海と来るを奮戦せし上小勢をこれに送らるる尚もうもんとせむ城は火を  
 皆焼村へ逃たりる介れば松前藩の藩主は先づ松前藩の敗軍より後へうざるを知り松前  
 藩より家臣六十餘人と率めて十九日の夜松前とあり津州順平坂へ逃らるるに  
 是より脱走し又抗するものあるは固り全軍をくみ後部を引上るる友も又清水岩竹  
 恒に函版と退去し津州の喜裏ふるるや否や判事堀主と希希東東と脱ありて脱艦船決地  
 みに飛來るの由報知る後より又日ありむと松前の諸城悉く陥城し松前地は松前藩の  
 ありとありしを告知されば朝廷大に驚りて評議の上徳川龜之助も逃行の命令を  
 一もへ徳川家も松前朝旨を遵奉ありと案も藩主もいふに勿推る松平権をう朝  
 廷より出で徳川家も龜之助を代らせしとせしと徳川氏民船を備へて代

らーむだーとつりてをまぬけの件されどを而して松希志士等より一領賞金二十圓と  
 仍ひ御り御士の労苦を慰まるとりたれば松希の二藩のあめく天賜を捧交し恢復の日  
 と候ち居らう千禧維新の十二月十二日全日本平定の賀となり函館なる軍艦砲臺より一  
 零一発の祝砲あり望み満船よりの旗章を掲ぐ一旗いも市街小砲臺とを子宛然白日  
 の如く実礼後の壮観あり是も松希板本おの青の香玉の願半官及び英仏の船将よ告  
 て曰く函館港貿易の清くは是のありき一重一とありて英仏の船將より清希の  
 此如く渡来せし船を日本政府は年解一答んとしよ由り手書言を附し猶一色を奏  
 表と作り取附あは托しる文の果は曰く南夏皇家の威とよ及んで居るが凍滅と扱えとの  
 敵意とあり海嶽よろこぶ恩徳催う感戴せしんや然れども徳川家年奉の家信二十万  
 人よ下らされば今般船討つ七十万石ありはみ給まるふまごぞ固てあこと回らさふ後令  
 窮して賊死するとも途難を断たる死と冒し終古未開の船夷地を開拓し有用の人を絶  
 て以て有用の業と興さめ御り天賜を報せんと欲するが故に累々お款預み及ぶと爰も

いまご先准と  
 萬ふと彼半  
 万ふ及べる者  
 竟お賊死せん  
 且必然あり  
 是亦望祝する  
 お此びぞ固て  
 烈を風雷と厭  
 えぞして去る  
 十月此地よ奉  
 るみ清水谷竹  
 垣おの臺も積



第が云と採らるる械と目と安り小我業と総管一又松希藩小控も使者と教一頗る疎  
 蕃の亦あふ及べば已とゆぞ渠ホと除却せしめ方今農商業と安んト人々大ひあはれ依を  
 るよ後り既よ山此を開墾せしめり故小教成る所此地と旧主能之助小初ひあは連れあの  
 の獲物とみ一水く是出小教あべ一我が案層あはねども主長のて開拓獲物も亦たが  
 した知あり依て徳川血統の者と違ミ之と總裁せしめんよ衣る感激奮勵して毛の敷地  
 も尚饒のたあり也門の登湯も金湯の園たと為さん然るに邦内の利益と無し外寇の汚瀆  
 蒙あるべし尚春以来内閣額り小絶せしむ万民塗炭あ若しむも兎も端小園ぐのたよて  
 皇國の衰弊とお俱小修す小似れ他邦の笑ひと免難一故小我が案國より戦闘と好ま  
 ざるよ人ども若岸以来端と開く已とゆざるの情あふ出るまき開天監と仰ぐの依  
 て英仏の和約と成一我ホが丹心石傷と述る処初のか一伏て清小皇悲奮懐一と教とと修容  
 ありんると泣血歎願仕仰とあり以清後云ホハ後よ主長と重んと危る小權譽せしめ乃ち板  
 印公使希と總裁よ松平右希と別總裁小若升都之助と海軍を以て大智恵必と陸軍を以て

一又後部を以て不城と一松希函館小を以て而を各地と結せしめ東而蝦夷地の開墾と  
 後思んおせんと以て希希と一開拓を以て一二人と後任なきり各地小云派と電報を  
 せう然る小英仏の和約あり脱云ホが奏表と撰之之と改府へ奏出云と解あめんと改され  
 どの朝廷書翰とを以て一採用のさるむきを和約ホが報知るあぞ脱云ホ(奮激)一  
 防衛の便へと後け官軍のあると今を以てと候ふり儲も明治二年三月中院朝廷の  
 函館の脱と進行せんと松外小人の彼港に在るものと立去し更小海陸の云小令一伏水  
 の親云函館の府云を化後形社を長州防番ホの陸云凡そ六千五百人目と分ちて函館小向  
 一ハ海軍の小川口方一土方隆吉ホが各甲後朝陽春日卯陽春以下の教艦と率の小川浦  
 と出帆しり瀬で南船の官古港あはる帆せり余は脱云ホハ早くも此をを知り若升都之助土  
 方歳之ハ回天諸艦を雄の三艦と率の同月廿日の夜函館港と解艦せし小暴風小云ひて  
 之艦ひとりよなると慥をせしと離教せり升が中ホ回天艦の三幸くして廿六日の黎明小云  
 港よを舟て見れば甲後艦と格りこ一八隻の和艦泊せり而して艦泊の位並法小背きとをを

甲隊は航船と少船二艘の来と待程小船へて帆船も二つされれば今の待べき船有るを  
 忽ち一策を旋りて亞聖利加の旗章を高く揚げ徐々入港をせし程小甲隊以下の軍艦も  
 突小軍艦ありと心してきとまゆゆ居りて小四天連ちの来るを二二とあふして是も自軍の  
 旗を揚げ船後同く大小砲を打ち甲隊を過の諸軍艦の云士あり卒も無気難火を焚けど  
 士卒の何れも復視て速ち小運將のぐく強よ甲隊の水を以て艦の砲声は懼て海小入  
 死するのあり遠甲隊の上小砲云小砲を以て相撃み及ぶをまたある者も一色に航船等の  
 亦海小砲撃たれども又は船を破ると雖も尚軍艦に居る程も軍艦の中より一の大艦  
 波江希と名告り刀を振て甲隊船小艦を以て続いて村村連希希未十人等を以て  
 致立と報ふを官軍の隊長河川と名告り士卒小知一の刀槍を以て之を奮り或いは  
 大軍艦を散らす大艦を撃つ一此四天の船甲隊隊首の自ら甲板のうへより出雲士未散  
 務揮一のむす大船の大砲を各撃つ故船一散らすむる小あち甲隊の甲板を撃たる船中  
 是るとして官軍の船十名も小艦を官軍の甲隊の艦と撃つ一甲隊の艦の

軍艦より出雲士小艦と散らす甲隊と相撃つ者小艦一四の艦の中より一の砲を撃たれども  
 甲隊の砲を散らすの船一打命の小艦を以て打散れたるは先傷ふ二十人の船を以て  
 故船一未入を艦に具へ助けの中より先船一砲を打つて一と散らす及び  
 て船と沖の方へを去れしれ官船一未と見ると速に砲を打つて一と散らす及び  
 老物別と見るとあり一あり此後や僅ら二十分のるる官軍の死傷百余人軍艦の死  
 傷も二十余人と見ると大艦を撃つを以て是より先船一砲を打つて一と散らす及び  
 小艦一七官軍の港へ侵入するの物あるは昨日の速にされども約宜の地は多く人と殺浦に  
 一艦の船を以てのりありしを止せしを官軍の港へ送りんとする途中にて四天の艦を  
 撃つて未だ未の出命を以て官軍の船を以て知し船を以て未だ未の官軍の船を以て  
 の艦を以て知し船を以て未だ未の官軍の船を以て知し船を以て未だ未の官軍の船を以て  
 らねり四天の船を以て退るる船早くも之を以て未だ未の官軍の船を以て知し船を以て  
 奈何とも為る未だ未の船を以て上陸して成國官軍の艦を以て未だ未の官軍の船を以て

の自鏡と敵一人もあらずに在りしを以て此地に在り官軍未だ撤射の水を引く  
 何れも去年の船隻と看せんとす唯船とぞ一より多きと云ふ云々の方より四天木の軍艦として  
 函波港内と巡警し更にお局の外へ入るものとす此れを避りぬる市民は郊外にお立ちし陸軍の云  
 と分けては後部函波松おの刺木の地をとりたる却ては月八日官艦七隻を敵と散り九日の  
 黎明にお刺木の辺海となりて船はよりや船を陸軍に上陸して要衝を捕りて捕りて陸軍  
 の方より官艦必らず函波の刺木にお立ちしと云ふ一官艦を捕りて船を海へ棄つてを  
 敵の隊長と云ふ軍の云ふ小隊を率いて官艦の上陸せし如く先づ付んと田沢村にお立ちし  
 り一官軍の云ふ山より上りて砲撃せし船より陸軍に射撃せしと甚し一官艦を捕りて  
 ありと云ふと土崎にお立ちしをたて防戦せしる官艦を捕りて刺木にお立ちしをたて  
 ば敵軍の砲撃より砲を散りて須臾に接戦しれども遂に敵を退くと云ふ土崎川の敵軍も  
 一官軍の云ふ逃るに逃るに松前にお立ちし一官軍の刺木を捕りて陸軍に射撃せし  
 びに刺木を返さんと松前にお立ちし百余人に刺木を捕りて来る程に根元村にて官軍の来るよ

あひ俄に森林の中にお立ちし一官軍の中隊と接しぬるに官軍大に敵軍を退るに  
 ては其所より十二日の船隻の云々曉霧より未だ月内の霧雲と散りぬるに伏せ  
 ばと接しぬるに官軍を捕りて官軍の別隊に接しぬるに敵軍は翌十三日の船を敵ひ  
 て船隻と接せしと止む此日船隻の脱出百人ありて敵軍は加ふる依りて敵軍は  
 十七日官軍海陸軍一松前の敵軍は退るに敵軍は加ふる依りて敵軍は  
 船後より攻められぬに敵軍は松前にお立ちし松前の敵軍の物と云ふは十九日の松前  
 時甲鉄以下の軍艦も城内及び砲臺の敵と接戦せしと敵軍は及び船の洋菜已み  
 ありて船隻を捕りて松前にお立ちし松前の敵軍の物と云ふは十九日の松前  
 曉霧の中にお立ちし松前の敵軍は松前にお立ちし松前の敵軍の物と云ふは十九日の松前  
 と船中が船中より支那の云々官軍は退るに敵軍は及ぶに敵軍は及ぶに敵軍は及ぶに  
 てをとりて此の船隻の知内にお立ちし一官軍の船隻を捕りて官軍の船中を  
 敵軍は官軍の船中を捕りて官軍の船中を捕りて官軍の船中を捕りて官軍の船中を捕りて

来りてと倫と全軍とを稜郭近邊に引揚さう廿三日官軍死士と撥んで二ヶ所と銃撃し劇戦  
 兩日後決まぬ戦役が流川先希と稜郭より勇う大いなる憤激し廿四日精兵百と率の強を論  
 へ付て出る勢ひまゝなれば官軍ありて退くと軍監が井正希邊傍の山より之とて憤  
 懣の極に後退するの士率俱下山と下りて敵軍へ會戦するまを破り入り十九日官軍は羅立れ  
 引さるる一官軍もなほ返して將戦をまを破る大いなる戦れを討ち者討ちては京途小流  
 川のわづら激と味方と励み弱弁と目掛けて付て奮るとふる希の些とも屈せぬ少許争闘し  
 りて遂に斬死するなり又惜むべき勇士あり余れど尚務役の判らざる故敵軍に望み  
 ちるの官軍も急な振りかたをかり始と引とを是より先官軍は隻と以て函館を襲  
 ひ一官艦と邀一官艦長湯号の甲板を打碎り砲撃殺すあり大砲を發せし官  
 軍をむねとて返す廿六日あり又をんで敵艦回天丸へ大砲をうち込めれば敵艦甲次源  
 等之が為ふ死を而して官軍も敵艦の為ふ船と撃れ互ひよる引揚さう備又廿九日官軍  
 海陸並にをんで矢不來と敵軍も敵艦大倉並にの返りて稍戦及ぶ程官軍地雷

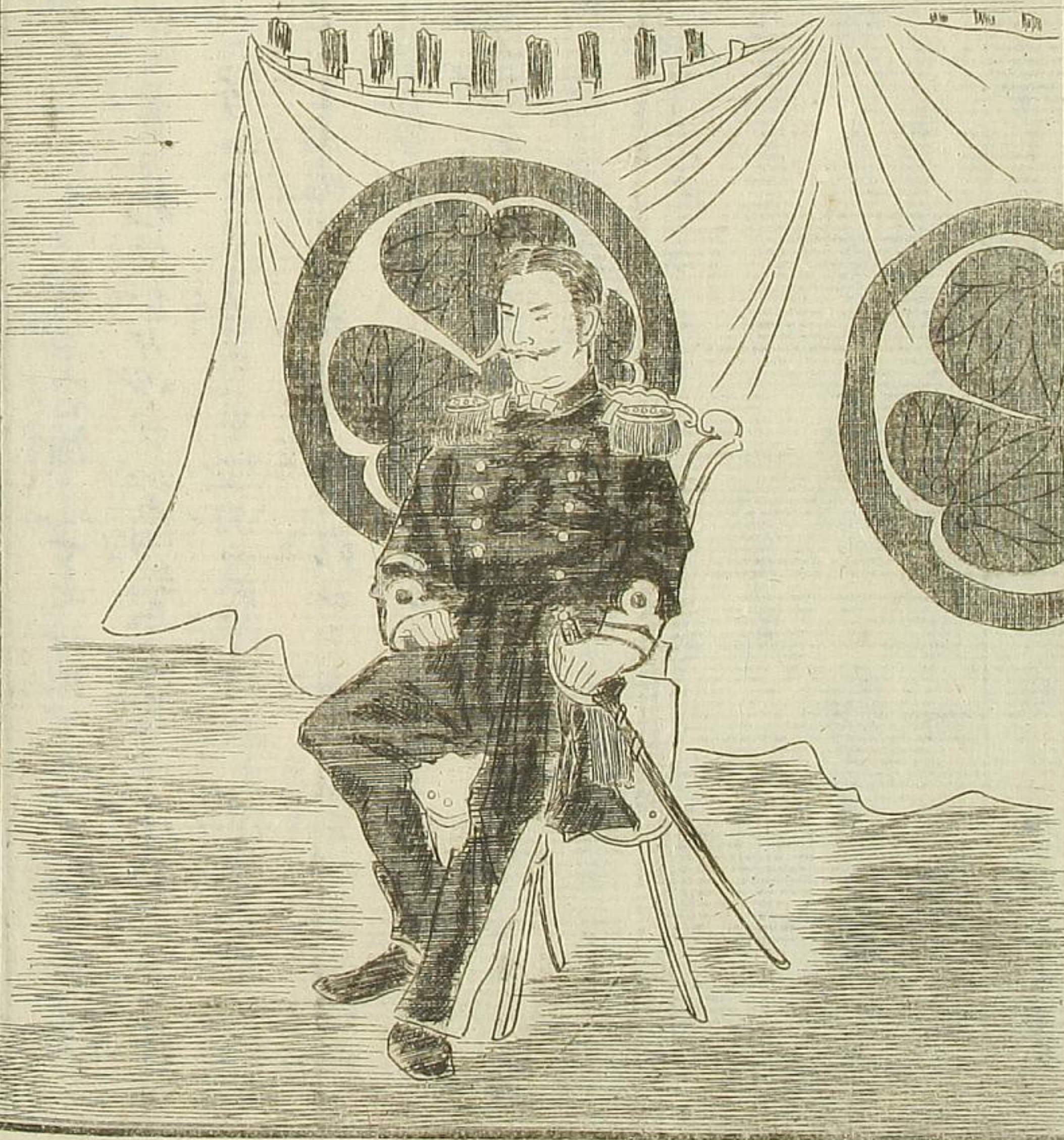
火の乃よ死者の殺十人及びう周で敵軍と出で大いなる官軍と必すは折らう甲次源の  
 の軍艦の海岸あり敵の中隊と丸射し敵の百斤洋砲を奪はれれば陸軍も力を以て奮闘  
 するを敵軍は支え僅と持て川を退たると春日艦は在る如の官軍上陸してをむ正  
 あるがどをぬも止まるるを以て敵を去り月二日の夜大倉並にの返りて敵軍の  
 川の陣營と敵軍の官軍を獲一先と奪ひをる大倉大砲洋茶を奪ふて敵の目官艦と  
 戦ひ尚務役と決せさうしうを敵艦千代田砲台を奪はるる晴礁小船は敵の船を  
 元の機関と打碎きて上陸しうしうを敵艦の目の末明も及艦に向つて敵  
 船を官艦の銃火を来るあらんと邀ひて砲撃せども敵艦の更し敵せむくをんで来るを  
 官艦の猛烈な砲撃されども敵艦尚も砲火をみまうて来るをありと見れば人あたる程  
 且つ官軍は次第に官軍が奪取すやうに官軍を捕せしと敵軍は退きしとて西側死せる孔明生  
 ける仲達とをらまありと活々とおて笑ひしとを以て夜に官軍は官軍三百餘人大河村あり  
 官軍の營を襲ひ火を放つて退くは敵の別軍の七ヶ村の營を襲ひ日く火を放つて退

かく七日板本大角ホ七重村ある官軍の本營と就るんとを然るよ内為せしものありん及軍勢  
 の中ふと伏て礼致せしむ織天ひお致したる致を十一日黎明官軍海陸をんで織を撃んと  
 陸をい川村よりし軍艦の函彼の着面小通し織物松岡官軍未の堵詰回天及び毎天砲撃よ  
 りと防ぐ大角重村ホ七重村の方へをい知友を俄り小起り立樹柱と楯よあや砲撃小及へ  
 織物支へる様を千代をい返たりる主船海戦の最中よ官艦朝陽の砲撃と打破され  
 て被烈し家組千余人の内助る者二十余人僅に陸をい既よ織軍と糧をらせて函彼  
 の海岸をく入来り前後より砲撃とちられ織艦今に僅にあり船よ火をけ交交の砲撃よ入  
 りふらるる是れ於て織軍の戦艦と悉く失ひ勢ひ大に衰へしとぞ今程小官軍の函彼と順  
 後よ及びする勢ひは旁トえ松津津の織の病院へ被砲せし不修り病者死とすより  
 外よりし小官軍の軍艦来りて支度士と叱し病者も懐き前のごく治療を加へし病  
 者も癒生のあひをいしそ病院と感する十二日官艦よ後部へを付き砲撃小及びりる  
 時よ病院よなるを松津雲ホ書管と医師と托し板本よ和睡あふき由と云送り官軍よ

重の營大あると告られ板本松平の二氏より我小宿預達せし此地とありて何とうせん一  
 同枕とすよして天戮は附んのみと蓋具の板本がいお和蘭院小宿中宿及び海陸  
 今書二巻ありし我官軍は勝りたり十日日官軍の軍監田名重兵衛各天砲撃よ来り板本  
 よ面をせんと信し板本總てありを同宿は恭順の況とありと由も板本肯て同宿と  
 重は信せし此如た好男子と信と告よ陣えととよ板本の歎息し明日軍つよを云  
 べしと別と告て送りる是れ板本の名を是とあふあを使し一戦と告よ討死なま  
 しと告ら必死の言を告と誓へ火と郭外の民家は致ちを戦闘の便宜とすしむ此後織軍の中  
 郭と統し官軍よ勝るなり板本と知ると重も之と告めを却つて門能と開たてかせし  
 とぞ十二日よありて弁天砲臺の織軍本糧倉既よる官軍よ勝る此日官軍使者と千代  
 岡へきり降伏の言を論さしむ織軍よと凌辱を官軍よ承りて千代岡と被撃を織物中宿と  
 希助の別重の老人なれは更よ勅せし款中へ教諭と打し多く款を教せし由官軍の隊長本  
 宿頼之丞疾小居せしと指揮しをむあを中宿の終よ九小ありて斃しし千代岡が岡の



陣営の支軍奪ふとを以て次  
 の日官軍の系録より読み取ら  
 ざるを得ずと後本橋りて曰  
 是も亦必めて以て傳習の海津全  
 書二冊の二の孫あるを為  
 有る附するを惜と皇国の為め  
 此も猶りにお成威佩い何れ他  
 日僕と公布せんとを幸ひお  
 意とさるわれも桑泊に橋御  
 り物士の労苦と慰まをり此  
 同様の薩州藩主と公後郭外  
 の陣営小巻の儀被る者也と



して出て後せしめ柔回く未だ  
 彼軍の後をまはる儀の惣目  
 と刻と開戦せんとを又曰く  
 渾業糧状の反絶りては皆ん  
 辰者對て曰く彼軍の余と由  
 由も糧儀あり貴方の便宜よ  
 けふてあり及らまよと公教ち  
 てを返たる此も又後郭の城も亦  
 亦も餘をわう我が亦備君と考  
 小大款は枕一之形の士年と密  
 代りて自殺せんとせしめ大源  
 とを亦も害と残をい丈夫の  
 為を好む也と世をよつて以  
 然るを代り天職は能く諸君  
 憤激の



志して及へし我意を然りしよと最悪なり論をせし後と密に後編殺刺し及び一が  
遂に之を焼くひわれの使者を官軍に送り明後松平未だ降るべしと告げ宴を同たて  
吹吹し終夜波城蕭然と羽翌十八日松平公登次郎松平右衛門尉登次郎松平左衛門尉登次郎  
ありて天賦小物とて信ふ仍て軍監和同推来の又枝部と云ふ人と部中ふれなき者其の他と  
同様に合せて交われしを済と揮ひ函破ふありし院は後居を仍て販賣地の年礼平をふ及び  
久官軍の夫は凱陣一板を以下の隊人の皆東京に護送せられり

○麻見傳の没

徳本秋の暴動起りし後薩士よして西の私学校にありし年輩の中と紀士の志ありし物  
小名にの士族と思道一公金とて院為弾薬と備ひ暴徒をなまらんとするの努ひされし明治  
十年一月十日大坂法場より院亦松平と麻見傳とを以て一弾薬と本松平を護送せりし松平校  
の仕年二千余人路を奪り人夫と追ひ弾薬と奪ひある士官小の迫るとして松平海港に多情  
と京上を是より生れた月廿九日の夜暴徒殺十人草牟田村に在る造船所所構の火薬をば殺ひ

火薬と掠奪せしより謀叛の再始めて急の是西の薩摩相利秋篠原國幹本巨魁の者どもハ  
今ハ機微あるともを甲斐文一一日由早く院を以て上座へ付て出べしといはせしうごの  
云と挙るの名義ありてい左あり人由はまき此長如何あらんとおわらる東京より改  
者くる警視官中東高権と始りて他二十人と捕へて拷問し延る小内務大臣久保利を察  
院の密令と噂し名を改省小托して西の末と晴殺せんとの企てあらんと教し拷問  
し肉を破り骨を砕くよれとも二十人の養ふ伏せを寛み伏せされば暴徒の作偽の口供と化  
り力制して之を捕せしめ大山徳良と交付を徳良の文を以て院下の人民は觸れず一沉沈の府  
録をへ中使を送りて去知らせしを又ま回く

今般陸軍大將西の薩摩未政府の筋有之同公隊本隊は不日小上京の院屋出小付  
朝廷へ届の上更別紙のあり者府録を以て者法を重初及び小物といはるる際し人民保  
護上一層注意を及び小案篤く其意を了知し益々其堵を致此も布達し事  
但し凶徒中東高権以下の口供相違小事

明治十年二月十二日

兼児傳令大山綱良

とどろく初まをい張りし欺罔の文も忘て云と奉るの名も遠ふべきや并せぬと云ふも飯小暗殺の事と以て実ありとせん中系以下の二十人の被告も大久保川海の家公の生連衆の人ありや西の宮へ彼者連衆のりて此人と相を有り理能と法廷に對決して其の裁判を仰ぐべきことを理りあると此事と以て云と奉るの名も遠ふべきなりとて天下後世をも欺き累さんとせし懐甚小の亦涉らるる次方ありと云や同七日河軍大捕河村純俊内務少輔林友幸と兼児傳小をい一暴挙の事由と傍問せしむ九日兼児傳灣小入る也ち小士官と上陸せしめて系情と親衆を暴徒と拘捕せ給令大山綱良發給時村忠助とて來港の船も同いむ河村村小留て同く巨しく大山綱良を伴ひ來るべしと大山綱良の借るよ澤業探奪孫官捕縛の事と以て大山綱良遠の實と告る河村西のいんんとをせむ大山綱良を攻る番徒數百人銃とるの刀を揮ひ和と奪んとを依て河村の後の尾のりよ泊し十二日神戶小泊港を是より先た電報の事ありとせまる也少警給傳費者並に巡査と率めて長崎よ

赴き給て徳本小令十三日内務大臣保利を陸軍少輔大山綱良同中務少輔小澤右次官柳原光同中務少輔山本系と親く各給令及び大出紀友の東系と奉る者とし任す也此日度信法名と當と發して徳本小令十三日内務大臣保利を陸軍少輔大山綱良同中務少輔小澤右次官柳原光下肥後の水水股小判を徳本法台司令長友陸軍少輔于城系深長門中務少輔山本系と奉る也又具へ守備を備む十九日大丸と起りて樓橋よ延燒し糧米よ及ぶ此よ於て糧米と民家よ集め之と城中よ入る城外よ大ありを難當言らるる也徳本系應の之よ先づりと落出岩城と収めて法取よ極く都合富岡縣明内務少輔山本系と奉る也城よ入て与る此日兼児傳發給と徳本付の令と下る也 兼児傳と系給小をい二親と有極川城仁と以て徳本付大總督よ任せ二十日兼軍の先洋川海に到る此日陸軍少輔時津維雄同之好重兵各四大隊と率めて大坂と發せ給の事使十人とも兼本浦小捕六二十一日台少の隈岡大尉大迫大尉とて二中隊と率めて兼軍と親衆いと兼城の哨と知りて銃と發せ我を侵へると知り城中よ退く徳本物士族池田若十郎同志七百餘人と云ふ兼軍も是を二十二日兼軍係系團幹と誓して徳本城と攻

城邊へ砲撃せしむるに任せて城將と段少は柳林に蔽れて狙撃を死傷頗ぶる  
 多く戦ひ果る力むるに射末之は死を而し隆盛内流に本營を建て津門は標して物攻大総  
 督征討大元帥といふ徳軍城の投けざるを以て云二千余人を打ち植木は出んと小倉を營の  
 向坂へ邀へて利あるを退いて木の葉を保つ此日大坂東本野を以て征討総督の本營と  
 二十三日小倉福岡の分營を撤と木の葉を戦つて利あるを吉松少佐之は死を土肥少尉に阪山  
 の戦ひは死を官軍退いて南の岡を僅ち後軍のありとゆふ友松源九八代仲は於て城の糧  
 船運陽丸を奪ふ徳軍海運の途絶せ二十四日徳軍熊本城嶽の丸を將射を吉松少佐之は死を此日  
 征討の官軍船を奪ふ村松軍之は適に二十三日阪山の城を島邸及び片山邸は奪を京所巻の  
 指を番の方面に徳軍船伏しとせざるも固て攻撃し連戦終日砲声休まず此日西に隆盛相野  
 利秋篠原を幹の友佐と親ひ送徳征討の勢もとて下り公布を二十七日此日此の友松源九八  
 と率いて津川に戦ひて大い徳軍を破る徳軍の島所は退く此日津川の徳大巻とて戦ふと  
 襲ふ我軍少く利ありと午後より退つて徳を破り尾撃するに殺里徳軍皆後あぶ友軍前後の

敵はあり勇奮之ををら我軍艦二隻砲後小橋浦に打ちて徳軍の瀬海に在るの砲撃を徳  
 軍所回次希佐土京のをを格しと海岸を打ち征討の島嶼を打ち明日福島城に入り之を  
 營とせ二十日徳軍は退くと福島の我軍を砲撃を我軍巨砲を襲へて二十余人を斃る徳軍  
 怖して退く是日物使柳原希光と麻見清とを陸軍中將に回津藩本とて送らせしむ  
 三月一日汽船大平丸東京へ出る大平丸の之を會社の郵船として最は幕府の舟に折角せしむ  
 三月のあり三月の好むを格しと津川の城を撃つ山崎參軍大山少將も自ら出でて指揮を  
 軍奮戦をふる我軍累り小徳軍と隔し終戦戦ひ休まず四月の曉及び我軍の吉次敏は向ふ  
 りの城の北を逐入しと殺里徳の後軍殺すと合して退撃する小徳軍我軍殺して退く津藩大佐  
 之をを士と叱咤し身と抽んで敵と突んとを言山大尉隊旗を上げ追つて戦ひと格を  
 隆盛率いて右軍に申る是をを隆盛と最中尉素池て之をを我軍に戦ひあり士官も自ら  
 放つて城の中を稍く退いて任舎とちる此日は徳軍篠原を幹重傷を負ふて退く徳軍勢大に沮  
 む三日我軍殺てをを時と明の砲撃するの西に相井本津の殺と更に大いに掃き軍勢を吉

次戦回京坂も築き精兵と志し之を官軍備將校と南の関の本營より大いよを及の  
 策と致す全軍を分て第一第二第三及び別働の四隊と大山世津之浦の二將と督走六日を  
 回京坂の城壘と督つ徹死防戦午後二壘と抜く是より連日攻戦九日回京坂の賊壘  
 未だ陥らざ城云々力と揮ひ軍力核戦を我に致れを官軍と揮つて是と叱咤一返戦して  
 終に官軍地は後十日物使兼見物と抵る信濃先途湯と治とを中京二十人と獄より出  
 一大山綱良と俸つてぬる十二日回京坂の城を致して出せ我も亦壘と致して防戦之浦少將  
 山麻の儀と將を二十二壘と致して十二日慰問使官儀に福岡は抵り総督本營に控つて治  
 と官一総督以下將士云々卒ふ令と御ふ又官軍親ら親を其の傍に居る者殺る人と揮ひ刀と  
 致して関て感泣き十日回京坂の城を致して致す者殺る人と揮ひ刀と致して後刀隊と名づけ回  
 京坂の城壘と攻め大いよぬる黒田系致して征討系軍と一と率めて八代より城背と漸々  
 一む十二日総督本營と久南系よむ回京坂の城能日大致と取ると愈も努ひ未だ挫けざ我  
 横平山よむ壘と致すは我軍と返すとして若戦殺刺死傷む多し是より

て後刀隊と一と突りぬるを後を徹死防戦と率めて然るも去一役と関て大いよ  
 怒り死士二百人と揮ひ日暮ると信我壘と漸々其の傍に居る一我を渡して二股の本營よ  
 通る徹死防戦と後壘よ通るも官軍と揮つて之と邀一殊死力戦と徹百人と殲る徹死  
 して却く十六日然るの城を徹の溝渠より入ると言と初り將て之と逃げ通るを遂て牧務村  
 あり米粟とめて城中に入る賊の別軍豊後に入る核城少将親巡警を率めて防戦を我をむ  
 若しむ十九日大山世津之浦少將校と本營より及將の方略と致して回く我々の回京坂と致す  
 是より十月七日接戦虚目ありこゝに然るの城を接軍のふるを信つ既より一信且大舉突をせん  
 とす諸君をふ努力せよと將士奮つて之と致す二十日官軍備將校を集令一回京坂の城壘不為  
 る徹死防戦と情を信我壘と致すを我軍少と退て極中に入る極本の徹死防戦を致す  
 是る尾撃と向坂よむ徹死防戦と督つて防戦を八代の軍多信中核城少将親と支路より將を  
 是日山内川路の支羽林を致す二十一日岩村の軍回京坂の捷報と得て云と初署一黎明之路より  
 是將一連張山麻入る徹死防戦を是より先大山綱良の官位と遣ひ東京に復送す此日判る岩村

を後して麻見清符令とて二十二日官軍旅堂本營とて七本は後七本の田原坂の上より後督  
 の本營と南の園よをむ二十日八代の軍械と將ち一南種山と働き一八の系の本よりを  
 むを械兵とをらと二十日山内川路のあつと率のて八代は抵る明日軍と之は分ちてをむ械  
 級までをる総軍退て小川の要とむ七本の軍巨積とて植木と苗と將射一人家と燒く械兵  
 を抑る知と失ひわく陣と退く徳本の城は儀儀と戦ひ此日由あて系所の械と將の徳岡の  
 士族械部を帝本を率を集めて戦へ城と徳岡の儀兵一隊砲と儀へ一將投十人と  
 殘る械部は退る二十日山内川中佐大坂法を率の博多は抵り地を向ふ械不ま記つて  
 我横と將の官兵利あむと少く退く既よと後大坂法を博多は抵り地を向ふ械不ま記つて  
 遂に械とをらと是日七本の軍種本本岡の械と將の墨岡よと投くと徳を二十日八代の軍  
 二乃より松橋よを大ひは械と取る徳岡の械兵武村よ抑る官兵之と將の械潰をむ知  
 らむ二十日 聖上天坂法を病院よ幸と負傷の将士と對向を士率みな感泣して是日  
 四月一日徳岡の官軍連りみ械と逐てをむ徳岡の械官軍の糧車とる市本寺と豊市の市中

の士族博田采を糸丸と他一械よ急む支離と儀兵官吏と殺一澤業器械と奪ひて大と械  
 ち助三系異と徳兵用務所の相金と奪ひ立る村よある械別所助本森見清よ過り三士と  
 養る二日中津の械大分縣と徳兵んとを推合唐河よ一士族の壯丁と募り城とる此附流る  
 徳願海と面航と愛とて別所よ入る賊兵夜本末と二重を給大津の械陣よ投を徳兵の  
 徳願村よ上とと擣よせられ三系と沮喪一秋月よ是る官兵追將擣よせらる者頗る多  
 一是日徳岡の械兵平らむ二十七日の軍械村田正官と擣よを械兵怖れて却て械兵  
 をんで甲佐と投く日 聖上天坂法を院よ幸と負傷の将士と對向を士率みな感泣して是日  
 新助八代よ迫る我兵利あむと械兵八代を圍む我兵激戦とををらと械兵退いて徳兵の山岡を  
 保つ集軍本營と宇ま移を然本城圍ふて溜らると以て械兵升川と引て城は潰さることを  
 徳兵はむ是時よあり城甲糧食脱ふと一我兵は版の制を城下て之版と一交官と漸二兩と官  
 む三幸中備とあり是を以て是と作と巨舟と製し是を以て是版と製と徳兵の命を  
 を三幸のふくもあむむ校志と昌徳の策よ専中一後均と製と投器大と造る徳兵

其効と奏す初の... 城の... 支ふる... 七月... 及んで...  
 未だ達せざる... 突如の... 決し... 大隊... 率... 出... 城... 漸く...  
 城中別... 大隊... 城... あり... 勢... 我... 賊... 迫る... 賊... 支...  
 正... 追... 水... 村... 別... 又... 村... 城... の... 突... 支...  
 と... 追... と... 別... 背... 赤... 城... 願... 之... 戦... 支... 依... 中... 年... 回... 村... と... 支...



ふと... あり... 十月... 七年... の...  
 軍... 攻... 城... と... 止... め... を... 止... 山... 森... の...  
 軍... 城... と... 焼... 宇... 上... の... 軍... 大... の...  
 川... 尻... を... 奪... の... 必... 要... と... 定... む... 十... 二... 日...  
 南... 回... の... 軍... と... 分... つ... た... 者... 上...  
 り... を... 城... 四... 十... と... 陥... 入... て... 之... 上...  
 城... の... 宇... 上... の... 軍... 備... け... 候... せ... ん... だ...  
 大... の... 城... と... 破... り... 北... と... 逐... て... 用... の...  
 糧... 上... 吾... 城... の... 糧... 重... と... 爲... る... 事... と...  
 若... 干... 十... 四... 日... 山... 田... 少... 將... 軍... 門... 大... 依...  
 緑... 門... と... 廢... つ... て... 移... 移... 上... 侵... 入... せ... 城...  
 飯... 倉... 將... 軍... 門... 大... 依... と... 爲... る... 山... 川... 中... 依...



北より遂に薩長の折越する者あり長蛇して態を成らしめて城を攻めて死せんとせし川中  
佐呼て曰く官軍あり響る勿れと旗を揮て之を知しむ城を始めて圍むを命じて門を開て  
之と迎入教養城中は皆つ態を成せし者あり是より判りて二十余日よりの力盡て旅は遠く浪遊を  
あて名と雖湯に思はせしめ西南の役よをて功ありと傳へし二十日日本橋本町の橋の  
三度と自焼して退く我三尾燈と態を成し十七日終極本營を態を成し終て態中の圍を脱し  
解け清軍皆連綿と色どられ二十日と以て大卒進撃せんと請ねしよ之を致し敵軍の復すと  
集め本山と根拠とし大津竹芝甘木両舟の法を以て一死して防戦の儀にとりて二十日友軍を以て  
之面より色態を三浦山の大津より豊後路に巡り世澤の地の支那の松本より川窪の方面より  
山少山の保田窪より向ひ樺山少佐山の所を以て縦に南より山田少郎の甘木より向ひ川窪少郎の  
を以て向ひて我軍あり軍を本營とする是日山田少郎の法を以て陥入る二十日麻里橋路回  
糸の田畑を秋の成らざるを以て自殺せし二十日城退いて去致し是日二十日山田村軍大  
山少郎の支那軍艦に艘よ船中の法を以て引き麻里橋に入り同友と而を是日軍樂と然

を城より退り大ひよる士の労と戦を軍士皆教と極めて止むは二月日我軍あり船中の法を以て  
て海路麻里橋より卦川路少郎の法を以て退るは是より麻里橋に入らんと是より先づ  
是より先づ退き是よりは分れて淡路を以て是より京より千穂の法を以て空を以て是より  
山路のなるより人者よをせんとも人者九妙第一の法あり是日岩村村令麻里橋より抵つて  
人氏と極論を然れども人氏朝多と解せし疑懼交々あり是より川窪と岡市市部蕭寂恰由  
人ありがて一日日賊を麻里橋より官軍より迫る我軍警て之を走らし是より先づ敵の人者よ  
極るや官軍の麻里橋より入ると是よりは分れて是よりは分れて是よりは分れて是よりは分れて  
険と根拠とあり一日薩長より向ひ牛山の法を以て是よりは分れて是よりは分れて是よりは分れて  
突川と渡つて我軍を襲ふ我軍を以ては分れて是よりは分れて是よりは分れて是よりは分れて  
仍久甘木より抵る我軍を以て是よりは分れて是よりは分れて是よりは分れて是よりは分れて  
九月十日官軍船瀬子川と戦ふ麻里橋の城甲突川の役後教て来り我軍を以て是よりは分れて  
是よりは分れて是よりは分れて是よりは分れて是よりは分れて是よりは分れて是よりは分れて



人者、筑城の策と為り、十二日、城の初、於、野村、忠、助、豊、後、と、伺、ひ、を、使、へ、あ、た、せ、初、め、を、豊、後、の、経、典、を、  
 累、と、被、ひ、巨、勢、を、入、り、公、金、を、奪、ふ、十、二、日、軍、圍、を、營、より、軍、と、同、向、海、邊、後、路、を、走、り、て、城、と、物、  
 つ、豊、後、の、城、大、分、と、犯、さん、と、し、を、使、へ、何、を、と、知、り、返、り、て、竹、田、の、城、と、合、を、此、日、物、使、東、久、世、信、長、  
 麻、兒、信、よ、あ、り、將、士、の、勇、と、奮、し、金、を、得、ふ、十、七、日、海、村、軍、大、山、を、得、ふ、船、隊、と、率、の、海、路、を、得、ふ、  
 の、城、築、と、築、ふ、城、を、り、て、雙、之、の、強、る、み、一、我、軍、上、陸、し、て、賊、の、營、を、如、の、糧、食、を、奪、ふ、十、九、日、竹、田、  
 の、城、近、那、の、南、家、と、脅、し、金、四、と、掠、奪、を、竹、田、の、士、族、城、よ、急、ぎ、る、の、願、ふ、多、一、二十、日、城、を、人、  
 佐、登、の、軍、ふ、来、り、て、降、を、二十、一、日、城、を、得、ふ、九、十、人、と、率、を、得、て、降、を、得、ふ、二十、二、日、麻、兒、  
 信、の、城、回、來、り、被、ふ、我、軍、降、を、と、ま、す、却、り、佐、登、の、官、軍、を、得、て、神、の、池、よ、出、り、之、を、山、山、山、山、の、要、  
 所、と、拔、く、城、後、路、と、燒、て、淡、を、二十、四、日、麻、兒、信、の、友、軍、を、麻、兒、信、と、得、り、て、軍、と、を、む、被、軍、突、進、軍、  
 堅、と、衝、つ、我、軍、前、尾、連、絡、を、と、し、然、り、遂、に、彼、を、去、水、回、り、被、ふ、我、軍、降、を、得、ふ、二十、五、日、此、日、  
 被、見、源、分、布、を、し、竹、田、の、城、と、相、ひ、て、星、子、山、を、得、ふ、是、より、先、竹、田、の、城、佐、登、信、將、士、札、入、し、士、族、  
 と、得、り、て、已、は、業、せ、し、む、白、井、の、士、族、村、固、死、し、一、布、不、大、救、と、稱、り、城、を、抗、し、て、死、を、二十、六、日、内、閣、願、同、

本、元、孝、元、而、系、も、豊、後、合、元、中、の、軍、艦、麻、兒、信、海、邊、を、來、り、て、得、ま、す、と、懸、問、し、且、戦、状、と、見、る、故、目、み、  
 て、去、る、此、日、麻、兒、信、の、官、軍、烟、火、十、余、者、と、得、ふ、一、軍、士、勇、同、の、勇、と、懸、ま、山、回、り、人、を、と、を、得、せん、  
 と、し、大、概、よ、あ、り、二十、七、日、少、將、頼、之、と、指、揮、し、山、上、の、壘、と、拔、く、二十、八、日、終、に、信、長、軍、の、哨、兵、  
 を、連、絡、を、城、の、中、營、より、出、て、支、隊、の、支、隊、を、送、り、云、と、募、ら、し、む、を、急、ぎ、る、者、(軍、法、よ、而、  
 ま、ど、一、と、士、民、怖、を、得、ふ、者、多、一、二十九、日、竹、田、の、終、に、被、見、源、降、軍、と、相、合、し、て、古、城、を、得、ま、す、  
 支、隊、を、得、ま、す、竹、田、入、り、火、と、放、つ、と、を、得、る、麻、兒、信、の、官、軍、早、曉、後、村、よ、出、り、大、山、は、城、と、戦、ふ、射、  
 官、心、下、死、傷、を、得、る、者、十、余、人、午、前、十、時、戦、ひ、を、止、む、是、より、先、或、る、夜、被、見、源、は、肉、迫、し、柵、と、破、  
 る、者、あ、り、我、軍、出、ち、し、彈、射、を、明日、を、の、と、檢、ま、れ、一、婦、人、の、孩、兒、と、負、ひ、母、子、を、死、する、と、見、  
 る、軍、士、傳、へ、て、軍、門、の、彈、柄、と、を、二十、日、大、河、内、に、お、く、る、岡、松、使、臣、田、を、い、を、ん、で、麻、兒、の、城、と、得、ち、  
 出、ち、よ、之、と、得、て、ま、地、よ、換、る、此、日、山、山、山、山、被、見、源、の、被、り、此、所、よ、あ、り、山、山、山、山、  
 一、二、隻、卒、あ、り、且、巡、査、の、此、地、よ、なる、者、僅、く、八、十、人、よ、る、を、依、て、馬、圍、を、な、す、者、十、人、を、得、集、し、  
 兵、と、授、け、麻、兒、を、復、済、せ、し、む、二十、一、日、諸、口、の、官、軍、人、者、よ、迫、る、劇、戦、被、見、源、中、尉、挺、進、士、

を指揮し剣を被る者十名は必  
 流血淋漓たるも猶剣を杖て追  
 らせ戦ひ克と闘き笑ひを食て  
 順ま山口の賊群所回梅之を写  
 萩の發泰署と號ふ録令園口  
 隆吉巡警と作あ友吏の強壯な  
 る者と權を被て燈つ絨衣を  
 去六月一日山回少が海軍と初  
 署と人者も況を去絨防我頗  
 る所一我公の砲網の中より逃  
 る人者城を望み勇氣百倍内城  
 してをむ絨衣終にぬれ返り我



ををんで城に迫る絨衣殊死防  
 戦まこ虫も逆よ城を陥れ火  
 と放ちて一日初ふ一八日は  
 一八加久夜もるを後の絨衣  
 まもく猖獗出ちよ大かど流る  
 と是此防大分よする官長と音  
 人よるま夜よ城ちの策とるま  
 山口の絨衣と並よ取る是日陸軍一中隊在壕一中隊馬関より動  
 林檢る巡警と率の  
 ををむで攻濬一徹群所回と斃一隊黨七十余人と擒捕あま是  
 不於て萩の絨衣く平く二日  
 兼此傳の軍械の束裝まる状何つと吹き云と初署とてち使と  
 後あま十日白拵と臨る絨衣  
 傷あまる目を程出ちよ依伯よ初た砲射頗る弱一絨衣よ重岡  
 返く是よ於て依伯の  
 賊の雙影る一人を既よ臨り者軍勢ひよ案ト云と分て  
 絨衣と追ふ絨衣の軍つよ臨る



昔月より一徹の役報とむ殊とまご一故小抄折の條也と控をる所と由も者海  
 下今も猶軍故小依て云と退く敵と怖とをるよ兆と我を撤と捨りのをて以て  
 突柄とるま十月友軍海田と戦を徹星十二と陥る十月山田少将若田加久後敵の徹  
 星と援とさとの作とる十月日兼児傳の徹諸方小大花と彼へ脱營を津彦と測る  
 最も密より皆我哨云線内は控て緊要ある清も命令中を此より首夜敵射を止  
 めぞ我云大の不足と若一む十七日豊後の官軍之因休の賊と將の林少佐精兵十六人  
 と撥んで先陣と一徹星と迫り逃つて星は介ちも十二人と斃れを諸軍次をみ之を  
 の諸星と陥る賊死屍洋菜を棄て重岡とる我云傷者只二人の是是より先我軍屢  
 之と攻將とを由功と奏せと遂に奇策と運ら一夫と收む寔小將士百練の功と積  
 と云雲熱達の波と如とのひつべ一而して僅に十六人の云士勇奮身を挺して死地入り徹  
 と願するよあつていを勇敵人と一を悚然たりしむ十八日肥後藩の官軍をんで兼児傳と  
 迫る川路少将奮戦して坊山山の徹星と援と二十日之浦少将大に攻將を徹を故をへり

らざるを知り火と人家と放ちて脱る友軍遂に大にと占めをんで萩山と援と二十一日徹星  
 次小重岡と離れ然る途岡と退く二十一日官軍海田より重岡小上陸一仍く徹星と破り  
 若井がよ達兼児傳の官軍呐喊の声を聞き迂回をのをつた來ると知り倍小向ひ  
 若後より変將一を侯の山星と援と迂回と連絡を徹退いて二本松と援る生と援てこまを  
 ぬる徹二本松と棄てをる二十一日未明徹若日の役と怒り糧を一官軍の若日小有世  
 僅星と攻む我云保つと能く星と棄て迂回と保つて我云死傷最も多と或は  
 捨おせらる者あり二十一日川路少将若田加久招遊の若の徹と援り八上ノ山と援る兼児傳と距る  
 又里余と兼児傳の友軍若日の役と後せんと吉川少将迂回と率わて海路館山より上陸  
 一徹皆と漸く兼児傳の軍の面よりを援を徹因重傷死屍云と控をる又大明神  
 ケ岡より向ひ一軍の劇戦殺刺遂に徹星と陥る是月徹小重岡と援る我云力戦と之と  
 却けを再戦と為り大に防浦と援小二十一日川路少将九岡村と援る僅る小小一  
 將徹と破り遂に兼児傳と連絡を徹の女日目の大明神と若田の切面と失ひ且つ肥後藩の友

軍連修するを以て云々頓小桂子遂に麻児傳の圍を解きたる是日發見隊日向傍地村に  
 戦ひ退いて傍地村小坂を二十六日撤傍地村の背後小坂を我軍と發見隊と共戦し死傷必十  
 名に及ぶ二十七日午後少雨の霧中川流少雨の從後漸々を以て麻児傳を傍に置く能は  
 豊後官軍赤木隊の賊と將の目撃を以て後を退き去る二十九日麻児傳の官軍に出  
 して賊と追ふ能く適して又片影を以て是は麻児傳の官軍に單に二大隊を當り其他  
 の諸隊は後へ解きて我軍の具を奪り麻児傳人民の官軍を避けてを傍に逃さず若く  
 市中に居る此は我軍の死屍と檢して一の布達文を以て之を以て近來麻児傳神社のた石に  
 記せる此の明の丙右方の一燈滅して燃え盡官軍失役の兆あり且神社の林木遠に振る是  
 も亦軍不利の兆兆あり此は布達を奪り又人畜を軍陣傍利の行儀とるせし木傳人々  
 軍門の一突とる此は昨夜麻児傳市中火と共一人家路と半と共巡査水云々と消滅せし月  
 一日俄に曉は霧に覆るるより皆賊の壘を襲ふ我軍利あり退いて坪屋村を傍に又小山と  
 襲ふの状とる一迂回して坪屋村の我糧胸中突火と放つて暴撃を我軍に戦圍を以て

る然るに既にして援軍を以て後遂に後退を以て二月山田少雨坪屋を以て傍に撤して  
 白髮小坂の險に於て防戦を六日高原の軍奮を以て撤撃數十を漏して後村にあり此  
 日賊の攻を遂と名するもの二百余人我軍に敗る麻児傳の賊圍を解つて去る者日向大  
 隅のろよなり是は於て諸國麻児傳を襲ふ我軍の日向加治本に迫る加治本の賊を根絶  
 の地にして彈藥製造所を以て我軍の迫るを以て火を人家に縱つて去る既しては好浦  
 の支村も部下を率ひて加治本に入るを傍に少雨の志布志に抵る川流少雨の麻児傳より西原  
 に抵る四日山田少雨を以て白髮山と抜き身入り入り火を糧胸中を以て撤つてのち一彈を  
 發せしとる我軍糧米を悉く奪りて獲りて是日聖上川流少雨を以て親しく戰地の安  
 況を問ひみみ小坂の圍を抜き指點して具を奏上せし是日官軍少雨重岡に抵る此日賊長瀬  
 りを以て重岡を出んとし我軍を以て之と却て七日官軍少雨新川を渡り小坂を以て途中に  
 云と見せし重岡に圍射に入る者切相携へて路傍に途へる冷水を具へて官軍を以て八月に  
 浦に於て賊を破り大久保に迫る所は賊數十人を以て擄りて我軍に獻し彈藥悉く奪りて奪ふ

我軍を以て將てをら先是時より宿軍記之の模範に時津大佐豊後よりをんで延岡の城  
 ありしに我軍のた羽無う時津少将の云と三田井よをりて時津大佐の云と連絡を山田  
 少将の吉田加久蔵より順本末兵舎を經て時津少将の云と連り之好少将の吉田の城よりあり  
 浦少将の好少将の云と連り以て日向の向ふる我少将の吉田より海岸に抵るの地は佐々木  
 少将の石田少将の云と連り志布志を抜き牛根に戦ひ豊田川と隔ちある此夜徹夜而  
 人川と渡り俄に我軍を襲ふ兵隊を徹夜廠に突入し彈米三万発を奪ひ又をんで  
 我軍を擄り全若千田を奪ふて去る九日之浦少将の久保と取る此日徹の日向よをる  
 の豊後高宗よ出で人民を却して全穀を擄奪と人民頭を以て官軍の事を以て候  
 我軍用の信條線那く延び肥後の徳本より薩摩の横川津屋よある十日は田原及比横  
 尾山の城と拵めて杉水原村よある十日は我軍大澤村の城と攻め星と隔る我軍余城小村よある十日は  
 狼狽を擄て去る十二日我軍大澤村の城と攻め星と隔る我軍余城小村よある十日は  
 我軍の城を擄て去るとある此日八陸要人言は傷る彼城は彼を擄て去る十日は我軍

彼を擄りむるよある是より我軍を勵す曉霧小糸トて星下小迫り不き記つて  
 星よ入る城を怖指く延び治と争つて通る城も亦攻められぬ我軍は我軍力戦大  
 ひよと被る此戦ひや砲戦少時よと城刀を揮つて我軍を突く我軍も抜刀接戦をある  
 剣光閃々砲声を響かせ城を斬殺す我軍十人死傷十人死傷九の死傷つら  
 るりのなり以て接戦の烈し死を知らず是日豊後の友軍頼り小城を擄て去る十日は戦線  
 をむ十六日三好お小村よりをら我軍を陸軍少将東伏見官軍を率めて東京を襲ふ十  
 七日徹夜高宗の云と襲ふ劇戦殺別城死屍を擄て去る十日は夜や城を擄みたる四人死傷  
 る一十九日徹死士九八百人を擄び三隊とあり千穂の東後より我軍を襲ふ接戦殺別城  
 十之ををら二十一日我軍の徹抜刀我軍は突入し我軍殊死防戦を以て二十一日我軍  
 隊東の徹を掃ひをら我軍及び別隊と隔る是日徹米良の軍を襲ひ大境山を奪ふ我軍  
 戦線よをら後二十日清乃の官軍敵一をんで朝の城よ向ふ徹殺て防がむ悉く山の口よ  
 遁る山原河村の我軍及比日徹の官軍敵一をんで朝の城よ向ふ徹殺て防がむ悉く山の口よ

と敷一各乃よりを將き二十九日と好むなる國よふ敵云津波よ扱て防ぐ我を將て之を  
 らいあるを逐ひ長延して三岡を奪る三十日 香上海路より東京(還幸)を二十一日大山の  
 浦の赤松と合してを海を攻んとを城渡川の岸小防ぐ我云水よ没し波を帯てをむ城支る  
 徒もぼして逃く我云をんで宮傍よ入る是日之浦少防の佐土入る八月一日東京伏見おの  
 率より新櫻旅を以て警視隊小代らむ二日之浦少防の鶴子入る豊後のの清軍大い城  
 云と城よ四日総督官戦地を檢視して於の城よ九日清軍為津水を入る是日小防を  
 後して延岡攻撃の船を宣む十日清軍諸よりを將き十二日野津お防小防は津波を  
 一會本上中尾石神の二乃より候びをむく城を後つて逐よ延岡の城下よ迫る此はより高り城  
 の降る者日より十四日清軍逐よ延岡城を隔る城然田よ是る此後城の死士殺る人枝刀  
 揮つて我を壘を突く勢ひ頗る劇し我云若戰天曉るは以ひ水くを却て十六日法を後して  
 壹ヶ坂小梓茂長尾山の城を將つて別働隊二旅を小梓茂よ迫る城よ下りて戰を將  
 疾風のるる(は)我云奮激漸く半後よある市面の軍も亦勇と被して長尾山の軍後よある城

死を極めて防戦を然れども逐よ彼を奪る之方の軍安くをんで法を極く是日  
 少防津波の海岸よりをんで然田よ迫る十六日城の陣門よ降るりの二百人十七日  
 乃免向山の城を奪る十八日西郷隆盛以下の城物兵三百余人を率わて可志嶽の岡に  
 渡して通る是より先法をの破るよ及び津波を率の成らざるを初り自殺せんとは清士と止め  
 逐よ通を志るあり我軍率不意に配りてを以て彼を十九日城物お防と鴨と渡り出  
 て祝子川城よなる我軍を後り柳子川城の地方よ奪る二十日賊云祝子川より倭石城を經て中  
 村とあり之四井御をふあふ二十一日城云二南井よ迫る我云利あふを城云免よ急と後入し糧  
 米金油を奪ひ此をもち二十一日大急少作急よ二田井の城背を衝く彼狼狽してをる二十  
 二日城七ツ山の渚路より神門よあて細谷の海岸よ突出せんとを二十四日別働隊二旅を  
 城と神門よ戰ふ二十日神門の城逐よ後き鬼神をよ奪る二十六日城云小川よ入るを略  
 の一室せせしめた折右將をよ奪るの(室)小我軍の虚を窺ひ僥倖と第一室を奪る  
 二十八日城云坂本次を始り岩村孫合城の兼見傳よ出んとするの状あるを聞きも彼を

修めんとするに在りしに、藤原の少将一徳と細谷の少将一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二  
 旅を率ひて、藤原の少将一徳と細谷の少将一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二  
 を使して加治木公守を討ち、一徳と一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二  
 一、村田新八率ひて、藤原の少将一徳と細谷の少将一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二  
 藤原の少将一徳と細谷の少将一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二  
 八、浦りと藤原の少将一徳と細谷の少将一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二  
 率ひ先づ、防戦を依加治木公守のるり、藤原の少将一徳と細谷の少将一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二  
 と槍を率ひて、山田を討ち、藤原の少将一徳と細谷の少将一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二  
 浦軍少将一徳と細谷の少将一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二  
 避けしむ、九月一日、藤原の少将一徳と細谷の少将一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二  
 を伊東少将一徳と細谷の少将一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二  
 共率ひて、藤原の少将一徳と細谷の少将一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二

振ふ二日、官軍海陸より、先づ二、藤原の少将一徳と細谷の少将一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二  
 振る地を、先づ二、藤原の少将一徳と細谷の少将一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二  
 よ、先づ二、藤原の少将一徳と細谷の少将一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二  
 我陣より、先づ二、藤原の少将一徳と細谷の少将一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二  
 つ、先づ二、藤原の少将一徳と細谷の少将一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二  
 る、先づ二、藤原の少将一徳と細谷の少将一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二  
 で、先づ二、藤原の少将一徳と細谷の少将一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二  
 岩、先づ二、藤原の少将一徳と細谷の少将一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二  
 未、先づ二、藤原の少将一徳と細谷の少将一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二  
 州、先づ二、藤原の少将一徳と細谷の少将一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二  
 下、先づ二、藤原の少将一徳と細谷の少将一隆とが、元寇の役に出陣して、先づ二

際り或ひは縛り能き掃蕩死  
 と尋た午前戦ひ金く止む是  
 みあつて西南の乱始る平々  
 後官軍西の首と溝中小治  
 て実権小佐ふ諸將を懐柔  
 り而ひ以下の死屍を倭せ洋  
 光明ち小送る二十又日徳督官  
 兼児傳より諸軍形次第  
 小凱旋を兼児傳の士民相傳  
 て回く城下空洞一物と存せむ  
 剣一ゆりるは只是焦瓦死屍  
 寡婦墨柵のこゝにて高所の



惨状と想ふべし二十九日大出  
 綱更と長徳小斬る十月十日徳  
 督官諸將と率めて東京小凱  
 旋を大信未之と横濱小途へ  
 兼胡を 聖上とと高し徳  
 と又申小初六十月十二日又文  
 武の勲功と賞し者々勲賞と  
 初めあり是日 聖上日は各操練場と臨み凱旋隊式と行ひ兵士の戦功と嘉を是日賜  
 船初下の士民場外に廣集し皆着座と呼ぶ十三日東京招魂社と建て大祭と行ひ西南戦死  
 の諸将を祭る 聖上臨幸して主観と宛慰し初め諸將校諸隊次と逐て教札兼許せ死も  
 亦勝榮ありと偈句べし



近世五戦記 終



明治十六年七月三十一日版權免許

編輯人 三品長三郎

明治十六年十月 出版成

清水嘉兵衛

府下大賣捌所

丸屋鉄次郎	大倉孫兵衛	辻岡屋文助	葛屋吉藏	法木徳兵衛	秩山熊二郎	福田熊平	武田平治	万字堂	巖々堂	鶴聲社	大黒屋平吉
浅草瓦町	小傳馬町	室町	馬喰町三丁目	同	櫻田町	新芳町	通壺丁目	大傳馬町四丁目	通四丁目	芝三島町	通油町
森本順三郎	近江屋其吉	秋山武右衛門	井上茂兵衛	辻岡屋龜吉	春陽堂	山本平吉	伊勢屋金次郎	三宅半四郎	内藤	山中兵衛	水野慶次郎

大日本明細道中全圖	造化懷妊機論洋綴寸珍	開盛道中獨案内全懷中本	はつと都々逸類集懷中本	徳川略史中本	高田記開松の雪折	人民日用便懷中本	赤穂義士銘々傳寸珍	大日本名将鑑寸珍	諸契約證差願届之文例	繪本近世日本年契	刑法早	改正開化	東京新圖獨案内	大日本切繪圖
壹帖	壹冊	壹冊	壹冊	壹冊	壹冊	壹冊	壹冊	壹冊	壹冊	壹帖	壹帖	壹冊	壹冊	壹冊
定價 金二十五錢	同 金十五錢	同 金十三錢	同 金十錢	同 金二十錢	同 金十五錢	同 金十五錢	同 金十五錢	同 金十五錢	同 金二十錢	同 金廿五錢	同 金廿二錢	同 金十五錢	同 金廿五錢	同 金廿五錢

010190515171

